明治四十年一月二十五日發行

（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第二百六號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十五日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第貳百六號目次

名家演壇

衛生雜話

大家談叢

飜譯欄

質疑欄

雜報

大日本婦人衛生會記事

謹賀新年

併而會員諸氏の健康を祈る

明治四十年一月　大日本婦人衛生會事務所

熱心なる會員諸氏より早々賀狀を辱ふし奉謝候餘白なきを以て一月三日迄の分を限り全文を掲げ御一同へ謝意を表し候

新年の御祝義御目出度申納候可祝

明治四十年一月元旦　札幌　久右ヱ門

新年のことぶき幾千代かけてかぎりなくめで度祝納まいらせ候

一月一日　大坂　岡田美壽子

謹みて新年を賀し奉り候

明治四十年一月元旦　仙台　椿隆子

改春の御慶目出度御祝へ申納候

明治四十年一月元旦

謹みて新年の御慶申納候　山口　關野秀子

丁未元旦　越後　内山泰子

謹みて新年を賀し奉候

明治四十年一月一日　岡山　吉富志茂子

謹しみて年の始をことほきまつる

明治四十年一月元旦

一月三日　岩手　小川島豐子

新年の御壽きいつ方もおなじ御事と祝ひおさめ參らせ候

一月三日　京都　仙田花子

新年の御壽いく千代かけて祝ひ參らせ候

一月三日　富山　久德喜代子

謹而奉賀新年候頓首　愛媛　漆原兵吉

大日本婦人衛生會

二月例會通知

來二月二日第一土曜日午後一時半より神田區一ッ橋通女子職業學校に於て例會を開き左の講話有之候萬障御操合せ御知友御誘引御來會被下度候也

一婦人病に就て　醫學士　佐藤得齊君

一身體及び其保護　ドクトル　富士川游君

明治四十年一月

私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を啓き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんと誰ともに希はさるはあらじされども其身健康にあらざれは此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〱衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつはら務るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の合合相率て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは良に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を拂はざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集合を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の談發演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治卅二年十二月改正）

第一條 目的 本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條 本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條 本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條、入會の者は姓名族稱住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續從末に郵なり）入會後轉居等あるときは直に事務所に報知せらるべし●第五條、會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條 男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを認めたる者は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條 會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條 退會せんとする者は其旨本會事務所に通知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條 本會に推戴員を設け其中より總裁一名を推し皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條 本會に左の役員を置く 會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名●第十一條 會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は會長に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし●第十二條 會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事長は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二出版、第三庶務とす●第十三條 臨時指名委員を作る●第十四條 會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす期中選擧することを得者とし任期中缺員生ずるときは會の次點者を以て補缺す●第十五條、會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條 集會は例會總會及臨時會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要のことあるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め遊會を開くことあるべし●第十七條 總會には學識經驗ある人々に衛生上の講演說話談話を爲さしめ會員をして隨意質問せしむるものとす●第十八條 會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會に紹介し講演談話等を傍聽せしむることを得 但衣服は總て質素たるべきこと●第十九條 講義演說等は男子の傍聽を禁ず●第二十條 規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條、每年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條 本會計所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條 會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條 會計は一ヶ年每に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條 地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條 本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條、支會には支會限りの會員を設くることを得●第廿八條 本會の雜誌は支會に一冊送付すべきを以て其會員數は支會も亦本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を購求する者に就きて會同じ●第廿九條 支會は集會の收支及狀況を本會に報告すべし●第三十條 本會は每月一回雜誌を發刊し之を會員に配付すべし●第卅一條 會員又は會員外の者にして金錢若くは物品を本會に寄附する者あるときは本會々長の名を以て禮狀を送り寄附者の姓名及品目を記錄し同本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條 會費は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割也）●第卅三條 會費は東京府下に限り每月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（牛込築土八幡町郵便扱所宛）振出しあるべし●第卅四條 會員中若し本會の除名となるべき所以ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

事務所 東京市牛込區上宮比町八番地

私立大日本婦人衛生會

●役員姓名／

東伏見宮依仁親王妃

總裁　周子殿下

會長　侯爵夫人　鍋島榮子

副會長　濱尾作子

幹事（いろは順）　鳩山春子
仝　羽田三枝子
仝　岡田德子
仝　高木かう子
仝　山本多穗子
仝　松平芳子
仝　三浦教子

評議員　石川貞子
仝　岩下ゆか子
仝　津田捨子
仝　長谷川仲子
仝　仁禮壽賀子
仝　四[illegible]升子
仝　穗積歌子
仝　土肥多越子
仝　緒方悦子
仝　岡山とし子
仝　小川孝子
仝　男爵夫人　加藤錦子
仝　片山[illegible]子
仝　吉武輝枝子
仝　丹波貞子
仝　高橋孝子
仝　田村きよ子
仝　男爵夫人　南部限子
仝　中濱芳子
仝　子爵夫人　松井正子
仝　岸[illegible]子
仝　三宅藤子
仝　宮本樂子
仝　宮下咲子

●支會、千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

（●は本會の爲め講演又は執筆せられし諸氏）

醫學博士　●入澤達吉君
理學博士　●飯島魁君
ドクトル　●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學博士　●伊東祐彥君
ドクトル　●飯盛挺造君
醫學博士　●伊藤隼三君
理學博士　●石川千代松君
[illegible]　●岩井禎造君
醫學博士　●石原久君
醫學士　●野瀬雄一君
醫學士　●石原久太郎君
貴族院議員　●濱尾新君
醫學博士　●濱田玄達君
法學博士　●鳩山和夫君
東京　●秋原綱四郎君
醫學博士　●芳賀榮次郎君
●長谷川泰君
新潟　●長谷川一登君
小兒科　●小原和之君
醫學博士　●岡田榮吉君
醫學博士　●林雅雄君
醫學博士　●佐藤達次郎君
醫學博士　●緒方正規君
歩兵中佐　●竹内文次郎君
醫學博士　●土肥慶藏君
醫學博士　●岡田和一郎君

醫學博士　●大澤謙二君
醫學士　●大西秀治君
醫學博士　●大澤岳太郎君
一等藥劑官　●大山正信君
醫學士　●若杉喜三郎君
醫學士　●渡邊乃吉君
男爵　●加藤弘之君
醫學博士　●加藤照磨君
醫學士　●賀古鶴所君
醫學博士　●河本重次郎君
醫學博士　●片山國嘉君
醫學士　●川上雅[illegible]君
醫學博士　●櫻田龜一郎君
醫學博士　●金杉英五郎君
醫學士　●笠原光興君
醫學士　●所澤光德君
醫學士　●河野衛君
醫學博士　●高橋順太郎君
ドクトル　●高山紀齊君
醫學博士　●高木兼寛君
法學博士　●高木豐三君
醫學博士　●田代義德君
新潟　●田代亮助君
男爵　●高崎正風君
醫學士　●竹中成憲君
醫學士　●高山耕安君
[illegible]　●高橋辰五郎君
藥學博士　●丹波敬三君
醫學士　●高橋良明君
藥學博士　●田原良純君
醫學士　●田村光顯君
醫學士　●久保猪之吉君
醫學士　●米山彥郎君
二等軍醫正　●屋野篠光君
醫學士　●宮本叔君
三等軍醫正　●横井忠國君
大日本教育會長　●辻新次君
理學博士　●坪井正五郎君
醫學博士　●長與稱吉君
男爵　●南部鶴男君

藥學博士　●長井長義君
醫學博士　●遠山椿吉君
醫學博士　●中濱東一郎君
醫學士　●黒川玄通君
醫學士　●栗本庸勝君
海軍中佐　●小笠原長生君
醫學士　●村松紙三君
醫學博士　●服川宗雄君
醫學博士　●栗本東明君
醫學士　●山下茂三君
醫學士　●山田弘倫君
醫學士　●山根正次君
[illegible]　●山川答二君
[illegible]　●丸山長四郎君
ドクトル　●松山陽太郎君
ドクトル　●小此木信六郎君
盲唖學校長　●小西信八君
[illegible]島　●小泉貫君
醫學士　●古川榮君
東京　●布施正顯君
内務省衛生局長　●後藤新平君
元帝國大學教授　●エ、ベルツ君
醫學士　●中野梁君
文部書記官　●寺山男吉君
醫學士　●寺田鬥作君
醫學士　●寺田織尾君
子爵　●秋元興朝君
前軍醫總監　●足立直君
ドクトル　●新井吉芳君
ドクトル　●高土游君
高崎[illegible]長　●土谷今次君
産科婦人科長　●水原漸君
ドクトル　●久保田誠厚君
醫學博士　●佐々木政吉君
醫學士　●遠山[illegible]次君
醫學博士　●朝倉文三君
ドクトル　●朝山茂六君
醫學博士　●吾妻勝剛君
醫學博士　●佐藤三吉君
醫學士　●櫻井郁二郎君

醫學士　●佐藤恒久君
ドクトル　●佐伯理一郎君
醫學博士　●榊順次郎君
醫學博士　●榊保三郎君
醫學士　●佐藤得齋君
醫學博士　●櫻井恒次郎君
醫學博士　●倉淵銀次君
醫學士　●北村精一君
醫學博士　●北島多一君
ドクトル　●北川乙治郎君
醫學博士　●木下正中君
醫學士　●北島小太郎君
醫學博士　●北里柴三郎君
醫學博士　●三浦守治君
醫學博士　●三浦謹之助君
小兒科專門　●宮本仲君
理學博士　●長島作吉君
醫學博士　●三島通良君
醫學博士　●三宅秀君
醫學博士　●三輪信太郎君
伯爵　●土方久元君
醫學士　●島村俊一君
醫學博士　●弘田長君
ドクトル　●日高昂君
ドクトル　●須田卓樹君
醫學士　●澁川德君
醫學博士　●木村德衛君
醫學博士　●森林太郎君
醫學士　●笹川三男三君
醫學士　●波多野保三君
醫學博士　●吳秀三君
ミス　●リツテル
ミス　●ヒユース
ミセツス　●コーカス
ドクトル　●菊池衛一君
醫學士　●橋本左武郎君
醫學士　●島崎作祥君
ドクトル　●土田卯三郎君
ドクトル　●佐藤巡雄君
ドクトル　●西山信光君



私立大日本婦人衛生會宇都宮支會役員
評議員 安井よしの子　副會長 柴田しづ子
評議員 向井やす子　前會長 久保田不二子

婦人衛生雜誌第貳百六號（明治四十年一月二十五日發行）

名家演壇

我家の病災

醫學博士　遠山椿吉君　述
伽速記事務所員速記

私は唯今御紹介を願ひました遠山椿吉でございます、今日貴婦人令孃諸氏の前で一場の御話を致すことは此上もない光榮に存じます、て私は豫て申上げて置きました通り我家の病災と云ふ題を揭げました、先づ此問題に就て少しばかり申上げやうと思ひます。

先づ此問題に就ましては二つの批評があるだらうと思ふのです。其第一は近頃我家の我子のと云ふやうな文字を使ひます所の修身書であるとか、文學書であるとか、或は演說の標題にまで用ゐられて大分流行つて居ります、私が此流行つて居る所の文字を殊更に此所へ使ひましたのは、神聖なる而も眞摯なる所の衞生の御話などには不似合で、餘り流行にかぶれて、ハイカラの形をした文字でありますから、其非難が多少あるだらうと思つて居ります、處が喜こんで私が此流行の言葉を使ひました理由と云ふのは、有名なる福澤先生が豫て御話になつたのを私は書物で承知して居る、先生が頑固なる而も未開なる所の日本の人民に向つて新らしき文明の學術を外國から輸入しやうと御志になつた際に、新舊の思想が衝突をして、どうしても思ひの儘に人が言ふことを聞いて與れない、其時分に先生の言はれたには、何にも自分の趣旨を遂しやうと云ふには形式は何でも宜い、人の好む所の形式を執るのが最も利益だと云ふことを言はれましたが實に其通りである、例へば思想の古い頑固なる所の老人に、新らしき所の滋養物たる牛乳を勸めるにしても、硝子の洋盃を用ゐ

舶來の御盆の上に載せてはいとゞ舶來嫌い新式嫌いの老人は喜んで之を飲む筈がない、さう云ふ場合には牛乳さへ勸めれば器などは何でも宜い、其人の氣に入るやうに金時繪の御盆の上に抹茶茶碗か何かに牛乳を入れてやつても其牛乳の利目に差支はない筈である。ソコで私も此衛生と云ふ御話は極めて滋味て興味が少くて、中々人の耳に入惡いものです、それてすから切めて標題ばかりも少し新らしい裝いをしたならばと云ふので、斯う云ふ題を喜こんで使ひました譯てございます。

　デツ一つは文字の通り我家の病災と申すので。私の家庭て、私の家族中て今日迄煩ました所の實驗談を致さうと思ひます、さう致しますと私は醫者でありますからして、從來他人の病氣は隨分診て居ります、それにも拘らず態々と自分の家庭の見苦しき、而も卑しき家庭の實驗を持出して之を皆さんの前て披露すると云ふことは、或は非禮てはあるまいかと考へました、けれども私はさうは思ひませぬてす、昔から三ひ肱そ折りて良醫となると申されてあります、自分で病氣をしまするると云ふと、其病氣に付ての經驗から殊の外上手にならぬければならぬ筈のものである、又同じ病氣を診まするにも、幾ら醫者であつて、病氣を物體視して取扱ふ職業とは申しながら病者が自分の家族てあれば、其感覺の深淺と云ふものは非常に違ひます、デ私が今日まて自分の家庭に於て經驗したことを皆さんに申上げると云ふことは自分の心ても少しも疚しいとは思はぬ、十分打明けて自分の不行屆から斯う云ふ事があつたと云ふことを申上げて、廣く申せば此道の爲に御參考になれば、私の家族の惱んだ犧牲が却て社會福祉の一端となり不幸が轉じて世の中の幸ともならふと思ひ遠慮もなく、此問題を掲げた次第てあるのです。

　さう云ふ内容てございますから、申上げることは、唯截れ〱の雜談てございます、系統もなく秩序もなく談片を取集めて、唯思ひ浮ぶ儘に申上げますのてす、詰る所私の家庭に於ける失敗は前車の轍を

履まざる後車の戒めて、貴所方の將來の訓戒になれば何よりの幸なのてございます。私は子供が澤山ございまして、家族が多い、ヂあるから從つて出來事も多くございます、家庭を作まして最早十數年になりますが、其間に出來た衛生上の事、或は病氣の事も少くありませんが、其の內二三の事を申しまして、それを種として御話を附加へて見たい、即ち先づ斯う云ふ意見てす、實例を申上げて後ち元此病氣と云ふものは斯樣な病氣てある、之を豫防するには斯う云ふ心得を必要とすると云ふことを申述べる積りてす。

第一　外傷と手當。自分の家庭に於て今日まて怪我をしたことが色々ございます、其內の一は私の次男の子供が往來頻繁の所に遊んて居りました、元來極めて悪戯の腕白者てすからして、一日偶々荷車に足を轢かれた、處が荷車は荷物が積んてある車てあつた、後に聞いて見ますと云ふと、空車に轢かれた分には兎も角も、荷を積んだ車に小供が足を轢かれると大抵は骨が砕けて切斷しなければ癒らぬと云ふことてある、其瞬間には實に驚ろきました、當人は前に申上げた通り悪戯者だけに是まて餘り泣くこともしない、痛いと云ふことを言つたことがない、淋しい恐ろしいと云ふことを知らぬほどの亂暴者てあつたがサスがに、此時は悲鳴を揚げて泣いたほど痛かつたものらしいのてす、其際にどう云ふ處置をしたかと申しますと、早速に家に連れ入れまして、其局部、即ち足の先きの怪我をした所を盛に冷した、水の交換し得らるゝ限り、手の廻る限りて續い氷を取寄せて一段十分に冷し、一方には電話を以て外科の友達の醫者の所へ迎ひを出した、其後は相當な手當を附しましたが、幸ひにして小しの畸形を殘さすして今日は健康な身體になつた、それが一の事實てございます。

モウ一つのは三女てありまして、六七歲の際に、食事の時分に沸立つた所の鐵瓶を持出して過つて倒れた、孫て戒めてございますけれども、不行屆の家

庭てございますから、さう云ふ疎匆をやつて、其沸立つた湯が着類から胸、顔にも半面かゝつた、火傷は御承知の通り恐ろしいもので、幸に癒つてもひッつりのやうになつて、光澤を變じて一種の見苦しい形體になるか、其部分が廣いと終には命に係はる大事にもなるのです、先づ取敢ず着物を剝取りまして、手早く水を以て冷し續て氷と水と入れて盥に冷した、而も其頃は秋で薄寒い頃です、裸體にすれば風邪を冒く虞れがあるにも拘らず其上、水を掛けるから隨分寒いのてブル〱慄えて居る、けれどもそれを厭ふ暇がありませぬ夫れより相當の手當をしました、所が是も仕合せと全治して、兎も角元の通りの顔になることが出來ました。以上の二つの事實は私の家庭に於てあつた所の怪我の場合てす、此二つの場合に於て聊か學び得た事を述べましやう。

凡て此治療又は看護には、輕重緩急と云ふことを平時能く心得置ねばならぬのであります。今火傷の場合に於て、舊弊の習慣として、火でもつて燒いたものを水で冷すと云ふことは之にさからつて却つて宜しくないと云ふ說を信じて居る人達が地方などには往々あるのですが、是は全くの謬りで今日の醫學には曾て無いことであります、凡て外傷、即ち怪我、打つ、切る、燒ける、總てのものに對し冷すと云ふことは此上ない方法てあるのです。

モウ一つ右の場合に於て、風邪を冒く虞があると云ふことを申した、秋の末であるからナカ〱寒い、それを裸體にして水て以て冷す、是が所謂緩急です、一方は急を告げるのてあるからして、先々のことを考へる暇がない、考へないのが當然です、凡そ病の處置をしますには前後緩急を能く考へないと、誤りに陷ることがあるのです、風冒を感く感かぬとては、それは感かない方が勿論結構には違ひないですが、それを顧るとより肝腎の手當を怠ると云ふことになるのであります。

唯今のは傷のない、即ち轢傷とか火傷とか云ふ場合てありますが、開口創と云つて、傷が破れ、口が

開いて血が出ると云ふ場合に於て、どう云ふ事をすべきかと云ふと、此場合には最も緩急を考へなければならぬのです、第一、口が開けば血が出る、其血を止めるのは必要であるが、或は其局部を清潔に保つ方が宜いかと云ふことの緩急前後を考へなければならぬ、止血と防腐それは何れも必要なことには違ひはありませぬ、けれども其前後を誤つと非常なことになる。一體此外傷に對する、第一の手當と云ふものが極めて大切で、其手當が最後の運命を決することになるのです、第一の手當が惡いと、其後如何なる名醫が駈付けても効を奏しないことがある、此會では屢々諸先生の御講義がありまして、救急療法であるとか看護の方法と云ふことは屢々御聞きでございませうが、例へば今外傷をして血が出る、此場合に血を止めることをのみ專一として恐ろしき黴菌が其の所へ附着することを忘れて仕舞ふとがある、之は我々の屢々目撃する、下級の無教育の人抔が血を止める爲に先づ第一に手近かにあるものと云ふのて煙草を付ける、甚しきは袂の中の隅に入つて居る塵俗に袂糞と云ふものを付ける、それから是も私の家庭の話ですが、私の子が外で傷を致しました所が、近所の御内儀さんで親切な人がありまして、血を止める積りで土を附けて呉れたことがある元來出血は、何にも付けないよりはさう云ふ細かい煙草、塵又は、土の樣なものを付けると云ふと、確かに血を止める効能はあるけれども、其際に消毒防腐、即ち黴菌を防ぐと云ふことに、着眼されて居らぬ、寧ろ其所へ黴菌をもつて行つてくッつける譯です、殊に土を付けるに至つては、幸に十人が十人共病氣を發せんから宜い樣なものゝ、實に恐ろしい、其厚意は謝すべしでありますれけれども、若しそれからして病氣を發しましたならば、其人の厚意の爲に命を喪ふことにもなるのです、又大きな傷をしますると血が迸るとがある、御承知の通りあれは動脈と云ふのから出る血です、斯樣な場合は少しも早く其血を止める手段をしなければならぬ、それは看護法や何

かて御心得がございませうが、色々止め樣があります、先づ急速にやれば、嚴しく抑えて、醫者の來るまで強く抑へ續け指の先などが紫色になるまで抑えなければならぬこともある、此所が所謂輕重緩急てす、大きな傷は成べく血を止める工夫が肝要てす、けれども其他傷て血が迸るほどてない、ホンの血がジユク〱浸み出すほどの者は左程恐るゝには及ばん、血は大切なものですから、一滴も無駄に溢すのは惜いことてはありますけれども、少々血が出たからと云つて素人の考へるほど恐ろしいものてない、場合に依つては少し血を溢す方が宜い場合がある、蟲や獸や蛇などに咬まれた傷又は不潔の刃物の傷などては、其流れる血の爲に却つて其局部を淸潔に洗ふて一つの自然的療法になることもある位てすから遽だしくそれを止めると云ふことは、必ずしも必要はないてす。

それから小さな傷の場合にモウ一つ大切な事がある、消毒をすると云ふことは勿論てありますけれども、何時拵へたか分らぬ舊き膏藥を附けるとか、或は譯も分らない所の宜い加減な藥を付けると云ふやうなことがありますと、それが爲に健康な身體へワザ〱病毒を付けるやうなものである、それてあるから傷をした場合には、良き藥がありましたならば素より宜しいのでありますけれども、若しなければ東京抔には淸潔な水があるから、其水て洗ふが宜しい、血が少々出る位ゐは決して恐るゝに足らぬ、少しばかりの小さい傷は慌てゝ血を止めるの必要はない、それより洗ふ方が一番である、其内に醫者の所へ行くが宜い、醫者に行くまでは淸潔に其所を保つと云ふことが一番の手段である、それを血を止めやうとして却つて病毒を被ることが屢々あるのであります、それは輕重緩急を見て手當をする第一必要な點てあります。

此所へ持つて來ました所の黴菌の圖は、私の處へ拵へて世間に出して置きましたから、是まて諸先生が御話になつた內て定めし御覽になつたことゝ思

ひますけれども、更に御目に懸けまして、其中に就て少し御話をしたいと思ひます。

總て傳染病は黴菌の爲に起ると云ふことは申上げずとも御承知でせう、處で其黴菌の中で世間何れの場處にも居る所の黴菌がある、それから場所を限つて棲んで居る所の黴菌がある、例を上げまするると、ペストの黴菌の如きは日本國中大阪最寄にしかない、又虎列拉の黴菌と云ふものは、現今では日本國中隅々まで何れの處にもない、黴菌學者の試驗の爲に貯へてあるのはありますが、世間に散在して居る黴菌は一つもない。處がそれに反對致しまして、或る黴菌になると、幾ら奇麗な玉殿高樓の中にも、又た吾々の住宅の如き下等の家と同様に廣がつて居る黴菌がある、即ち傷に付く所の黴菌は、主にさう云ふやうに廣がつて居るのです、創傷に付く黴菌は此圖にありますところの、斯う云ふ珠の繋がつたやうなものが第一であります（菌黴圖解を指示す）、でありますからして若も傷と云ふものを、此黴菌の附着を防がんで置いたならば、どんな奇麗な肌の清潔な人の身體にもくッついて、其黴菌が乍ち業をする。他の病氣はさうでない、幾ら暴飲暴食をしても、其黴菌がなければ腸加答兒などは起しませうが、眞正の虎列拉は起らない、只た今申上げたやうな創傷の黴菌になると、能く消毒をした室とか消毒をした身體にはありませぬが、其以外には何れにもあるのであります。

第二　**鼠の危害**、鼠は何う云ふ業をすると言へば、申上げるまでもない、物を噛んで器物を損めると云ふことは一つの害に相違ございませぬが、是は衛生上關係のない事でございます、所が御承知の通りペストと云ふものゝ媒介をして吾々を惱めるのであると云ふ事が明白になつて參りました、處が鼠はモウ一つ恐ろしい病氣を吾々に傳へます餘り屢々ございませぬ、稀なる病氣なのですが、私共で不幸にして之に出遇つたのでございます、鼠に喰はれました、彼の齒でございますから大きな傷は付かな

い、いつも小さい傷である、其傷は手當をすれば奇麗に癒る、處が鼠が一つの病を持つて居ることがある、病鼠である、其病鼠に喰はれると、それが原因になつて非常なる病氣を惹起す、之を鼠咬病と云ふ、此病氣は初め傷を受けて、二三日にして傷は奇麗に癒りますが、其後何事もなく一週間以上經ちますると、卒然として身體に震えが起つて、急に大熱を發する、それからして一日置き二日置きを以て熱が出る、弱い身體でありますと、それが爲に遂に斃れなければならぬと云ふ結果を來す、又數ケ月ばかり煩つて一旦癒つたらしくなり、數月ならずして又再發すると云ふこともあり或は數年に渉りて煩ふこともある頑固なる恐ろしき病氣が鼠から起る、私の次女が七歳の時に、一夜足の趾先を咬れた、豫て自分は鼠咬症のことを聞いて居りますから、早速其所の所に相當の手當をしたのです、けれども終に免れませぬて、九日目あたりから大熱を發して繼續すること三ケ月。處が此の鼠咬症と申すものは西洋には家の構造其他の違ひから餘り流行らぬと見えまして、此病氣の藥があるかないか又は如何に治療すべきかはまだ調べが屆いて居りませぬのですが、日本の古い所の本を調べて見ると、古い藥は書いてあります、其他は大學のペルッ博士が斯う云ふ藥が宜いと云ふことを言つたと云ふ位なこと、然し學理上ケ樣なる場合に信頼すべき良い療法がある、それは病氣と根比べをする所謂營養療法です、身體と病氣の力とを比べッこをする、其方法を早速行つて何うやら斯うやら命を取止めて三月ばかりで療つて再發もなく今日健全に育つて居ります、兎に角斯う云ふ禍ひを招きましたのは、詰り不完全な家屋に住んで居る結果であると思ひます。

之に就て何う云ふ事を學び得たかと申しますと、どうも日本の家屋の構造と云ふものは如何にも不完全である、どうか是は急な譯には參りますまいが、どうか鼠と同居しないやうな家屋に吾々は住うことを心掛けねばならぬ、是は差向きペストの豫防にも

必要でありますが、唯今申上げました鼠咬症と云ふ恐しき病氣を防ぐ工風を致さねばなりません、差向き家屋を改造すると云ふことは容易に出來ませぬから、鼠を根好く獲る、平時は左程惡戯はしませぬが偶々惡戯をされて斯樣な禍をされた時は彼は實に惡魔である、彼は命の敵である、鼠を狩盡すやうに根好く退治したいと思ふ。明治三十二年に神戸にペストが初めて起りまして以來今日まで私の家庭の日課として鼠捕りを命じて居ります、如何なる晩でも戸締りと同樣に捕鼠器が仕掛けてある、而も道具の續く限り置いて、道具は三ッ四ッ位あります、鼠捕の方法はイロ／＼研究もございますが、此所で申上げる必要はございませぬが、鼠捕は詰り根一つです世間にはイロ／＼のことを言ふ人がある、私共の鼠はズルくして取れませぬ、直ぐ隣りの品物は食いますが、捕鼠器に掛けてあるのは食はないとか、又は一旦使つた道具を再び用ゐると捕れぬとか言ひます、或はさう云ふ事もありませうが、決して夫ばかりぢやない、大抵は根が盡きるのです、根が勝てばキット捕れます、捕れば必ずそれだけの數が減じて來るのでありますから、私は七八年間一日も怠らず是だけはやつて居ります、殊更自分の子供がさう云ふ禍に罹つたのですから、其後は鼠を敵と心得て、捕ることを努めてやつて居ります。次に

窒扶斯病者の食物と云ふことに就て申上げます。看護法を御學びの御方は御承知でございませう、窒扶斯の看護が能く出來る腕前であれば其他の病氣を看護することは容易であると云ふことは能く看護學て申すことである、窒扶斯の看護が一番困難だとしてあるのです。何故と申しますと云ふと、窒扶斯患者は回復期に於て食物を非常に欲しがる、喝えるかわく、其時に病人の望みの儘に物を與へると云ふと、軈て再發をして之れが爲に不幸に出逢う、其宜しきを得ると云ふことは、看護中最も困難なることであります。

手前の家庭に於ては是まで總領の女子が煩つたこ

とがありました、親戚の者が家庭に來て居つて煩つた者がございます、世の中には窒扶斯は澤山ありますが、自分の目で見たのは無數であるが、家庭に於ては都合二てあつた、總領の娘などの病氣は七歳の子供てあつたから、モウ熱がなくなり、苦しい所がなくなり、唯かわくだけてす、物が欲しいだけてす、朝から晩まで物が欲しいと言續け、終ひには子供たから我儘を言募つて泣出す、其自分に泣くほど食べたければ少々はと云ふので、之をやつては毒だと知りつゝ、やつて見たくなるてす、それを兎も角も其情を制して頑として動かず、規則通り實行したが其結果全癒して今日は健全て居ります。此窒扶斯の回復期の看護に就ては、世間に面白い例が澤山ある、私の友達に醫者が澤山ある、其醫者の內て窒扶斯を煩つた人も少くない、醫者だから快復期の心得位い飽まで知つて居る、それにも拘らず自分が煩らうと普通の人の如く我儘を言ふ、此位苦しい事はない、命を失ふよりも苦しいと云つて飢を訴へる。或友人の如きどうも食いたくつて堪らない、所が持つて來て呉れるのは御粥か、パンか、其所へ馬鈴薯の小さいのが二つ三つ、處が昨日呉れたのより今日の方が小さいと言つて不平を言つたと云ふことがある、此人抔は內科專門の方て、其道に通じて居つて常々口に其事を言つて聞かせる人がそれてす、それを抑えるのが看護の役てあります。又た或る人が矢張チフス後で其通り飢えた、けれども醫者から嚴命を下されて居るから其細君頑として肯かない、それで不忠實だ、不親切だと云ふので離緣を命じた事がある、それて眞面目なのてある、モウ病氣でない、精神も確かりして居る。此時分に大人ならば言ひ聞かせることも出來ますが、子供であると夫れも出來ぬ、親子の間て見るに忍びんて御醫者さんはさう仰しやつたが內證でと云ふので食物を與へる爲に、折角癒るべき命を捨ることが屢々ある、又友人の妻君がチフスの快復期てあつたに看護者の不注意から冷めたき牛乳を與へたすると間もなく震ひが來續て大熱が再

來して癒りかけた病氣が後戻りして遂になくなつたことがある、是は啻に窒扶斯に限りませぬ、只其著しき例を取つたのであつて、此病氣には何々は食つてはならぬと云つて醫者が禁じたる場合に、之を破ると云ふことが世間に能くある、醫者に身體を任して置きながら、無責任にも醫者に隱して物を食すと云ふに至つては實に愚の極である、其位なら醫者にかゝる必要も何もない、世間には隨分さう云ふ事を誤まる人がある。

之に就て學ぶべき事が澤山ございます、元來看護法と云ふことは中々輕からぬ一の技術で、醫學と云ふものも此看護法に依て初めて全きを得る。昔から能く申します一に看病二に藥と云ふが誠に至言でありまして、看護が宜くない場合には、如何なる良醫の名術も其功を奏することはむづかしい、それで私は看護の術と云ふものは、智仁勇の三德を備えたものでなければその資格がないと思ふ。智とは智識學問です仁とは同情、博愛の心です、それから勇氣忍堪力です、之がなければ本當の看護は到底出來ないと思ふ。此事を聊か申上げて見ませうならば、第一は智です、知識のない看護は一向用をなさん、却つて害を爲す、幾ら同情に富んだ情け深い方が、病氣をして居る人を救はうと思つても、其惠が却つて仇になることがある、病人に取つて誠に迷惑千萬な事が屢々ある。極く分り易い例を申しますと、彼の印度の饑饉の際に、皆食ふことが出來ないで途上に倒れた者が澤山あつた、其際に惠深い仁者がありまして飯を與れた、御握飯か何かにして皆なに與れた、處が是迄數日飢えに飢えて蟲の息になつて居た所へ美味しい御飯を與れたのだから、餓鬼の如くそれへ寄つて集つて食べた處が間もなくして悉く死んで仕舞つたと云ふ事がある、是は死ぬのが當り前、死なければ不思議です、成程慈悲は慈悲に相違なかつたけれども、握飯が毒になつた、知識のない救ひ方をすると其通りなる、其食べた物が毒になるのでありまして、物を施すにも其方法宜しきを得ないと却つて

情が仇になることがありますからどうしても知識は必要であります。

それから次は仁てす、貴所方の御家族の間柄て萬一病氣等があつたにしても特別に仁と云ふ事は必要はなくなる、けれども看護は必ずしも家庭にばかり用ゆるものてない、場合に依ては往來に倒れて居る人を救ふこともございませうし、或は一朝國家に事あつた場合は特志看護婦として貴女方も應分の御助力をなさる場合があらうと思ひます、必ずしも是は業務として看護をする人に必要があるばかりてなく、何誰にも必要があるのです、それは何う云ふ事かと云ふと、看護は醫術の一班てある、元來醫術と云ふことは、仁愛とか同情とか、博愛と云ふやうな精神のない人には充分に實行することは出來ない、どうしても思ひやりの充分ある、艱苦しからう、痛からうと云ふので、慾徳を捨て之を救はうと云ふ一念があつて、初めて本當の醫術と云ふものが滿足に行なはれる之れてこそ醫を仁術と言ふのてす、看護も其通りてある。それを反對に何うても宜い、申譯さへ付ければ宜い、表面さへ術を施すが如く見せて居れば宜いと云ふやうなことては本當の醫術と云ふものは實行されるものでない、それてすから本當の立派な醫者、或は看護婦と云ふものは、人の知らぬ所の苦勞をしなければならぬのです。例へば車に乘つて往診をして廻つて歩く、其時に甲の家へ行つて病氣を見る、それが傳染病であつて其儘手も器械も消毒しないで乙の家へ來て見る、けれども其の手の先きに病毒の附いて居ると云ふことは誰しも知ぬ、自分だけ知つて居る人の知らぬのを幸ひに消毒を怠ると、爲に乙の人は病氣を移されて飛んだ迷惑を被むることゝなる、それゆゑどうしても是は博愛の心を持し公徳を重ずるのてなければ本當の醫術の實行は出來ない、看護も全く之と同じてある、どうしても、癒してやらうと云ふ精神の支配て學術の智識が働くのてあるのてなければならん、だからどうしても智仁と云ふことは離れられないてす。

それから勇氣てす、勇氣と云つても何も人と力を比べ戰ふと云ふやうなことてはない、精神の毅然たる、動かない所の人てなければならぬ、前に申しました窒扶斯の如きもさうてありました、一面には氣の毒てある、苦しからうと云ふ博愛同情の念を以て臨むに拘らず、一方には病人の訴を斷乎として斥ける勇氣がなければならん、總て病人と云ふものは、身體に異狀があると神經が過敏になるのです、即ち我儘になるのてす、それを普通の人と同じやうに取扱かつた日には大變てす、其我儘は病氣の爲に起るのてあるから、種々の方便を用ゐて之を宥め之をすかし或は嚇して之を斥けねばならん、我儘を通してやると、それが病人の爲に仇になる。

昔から申す通り、鬼手佛心てなければならん、鬼の手と佛の心とを持つ、人の病を癒すのは佛の心ですが、併し其病を癒す爲には隨分荒ッぽい事もしなければならぬ、又た菩薩の心子の手を斫る、心は菩薩であるけれども、場合に依ては彌陀の利劒を揮つて我愛兒の手を切らなければならぬ、詰り其病を癒したいと云ふ慈愛の結果として烈しいことを實行するのであります、それには氣の弱いことでは到底いかない、此看護術は御婦人に適つた技術であつて、多くは御婦人の手を煩はすべきものである、然るに御婦人は同情の念に富んで居るけれども、一面には鬼とならなければ此技術は本當に行なはれぬ、鬼となれと云ふことは鬼の如き勇氣がなければならぬと云ふことてあります。

窒扶斯に就て私の學び得たのはそれだけてあります、窒扶斯は此圖にあります此な棒のやうな又は長く蚯蚓のやうなのが窒扶斯の黴菌です（黴菌圖解を指示す）窒扶斯に就てモウ少し附け加へることがあります、東京で窒扶斯は年々盛んに流行つて居る、何れの家庭でも多勢の御家族の御在なさる所では數年間一人も窒扶斯に罹らなかつたと云ふことは極めて稀であります、歐羅巴邊りは何うかと云ふと、上水、下水が完全して健康な土地であるから、殆どな

いとは申されませぬが日本のやうに澤山流行らない、奈何せん日本ではまだ大變にあるのです、それが何處から來るかと云ふに、東京では幸ひ一面に水道と云ふ立派なものが出來て居りて、之には確かに窒扶斯は含まれて居らぬと云ふことは吾々知つて居る、然らば水道を使つて居る家庭に何所から窒扶斯が家庭に入るか、窒扶斯の入り込む道は澤山ございませうけれども、思ふに臺所から入る、臺所に持込む所のものは何かと云ふと八百屋、魚屋、豆腐屋、是等が一々水道を使つて居るかと云ふと却て使はぬ方が多い、從來の八百屋、魚屋、豆腐屋などゝ云ふものは水道の水を非常に嫌ふ、水道ではどうも品物が弱る、それは實驗上さうありませう、ナゼならば水道は井戸水の如く冷たくない、それが爲に彼等は寧てんで井戸水を使つて水道は却つて避ける習慣がある、尤も彼等は公德とか衛生とか云ふ上から割出して考へて居らぬからさう云ふ者が多い、それてあるから私共ては成べく魚屋ても豆腐屋ても水道を使つて居る所を選んて取寄せて居ります。

此所に報知新聞の御方が見えて居りますから申上げますが、近頃同新聞に豆腐の事が盛んに出て居ります、豆腐は私は豫て窒扶斯の一の原因と思つて居る、豆腐其者が何も害があるのではない、中々の滋養物でもあり、日本では賞美すべき特有の食物に相違ございませぬ、所が先達の記事に、井戸水を使つた豆腐は結構であつて、水道て造つたのはまづい、又之を冷して置くにも水道ではいかぬ、井戸水が宜いと云ふことを書いてあつたやうに思ふ、果してそれはさうであるか、豆腐屋、即ち營業人の言つたのを聞いて書いたのてありはすまいか、果してア、言つた人が水道と井戸水とを比較研究した所の結果であるか聽きたいのです、果して水道は豆腐に不適當であると云ふことを、確かなる比較試驗の結果であるなれば私は一言も言ふ權利はない、さうてなくして唯今まで井水を用ゐた習慣から彼等營業者がそれを嫌ふ結果あゝ云ふ事を言ふのではないか左すれ

は、世間に對して誤りを傳へるのである、物を冷すと云ふのは水其者の性質ではない、冷さうと思ば金さへ掛ければ冷す道は幾らもある、水の性質ではない所の、寒冷を望む爲めに危險のない水があるにも拘らず、殊更不潔なる病毒のある水を使ふと云ふに至つては、營業者は社會に對して不親切でありはしないかと言ひたいのであります。次は

恢復期の外氣運動と云ふことです。少なくとも急性の病氣を煩つて、それが癒りかけました、即ち恢復期の時分に屋外に於てぶら／＼歩きをして、身體を養　が必要であると云ふことは醫者が呉々も申すことで、是は此上ない大切の一の看護法であるのです、其事實は何うかと申すと、私が數年前に急性肺炎と云ふをの煩ひまして、數日にして熱は取れ、食氣も付き、唯身體に衰弱をのこした、此場合に外氣運動が是非必要でありました、然るに東京には到底思ひの儘に外氣の運動をする場所がない爲に、地方へ轉地をしやうと云ふので、相南地方へ行つて療養を二ヶ月ばかりやつたのです、モウ一つは先刻御話申上げた二番目の惡戯の子供、之れが惡戯の癖又病氣をすることが甚いのです、之れが一昨年肋膜を患つた、友達の醫者の人々の世話になつて漸く癒つた、それも數日にして熱がなくなつた、處が東京に居りまして一ヶ月を經ちてもスッカリ能く癒らぬ、と云ふのは適當なる運動をする所を得ない、都會はさう云ふ缺點がある、そこで是も地方へ出した、スルと軈て一ヶ月も經たぬ内に奇麗に癒つて仕舞つたのである、之が私の家庭の事實です、之に付き外氣運動の効能を少しばかり申上げて見たいと思ふのは、東京のやうな繁華な土地には恢復期に運動をする所はない、殊に下町に至つては寸地がない、往來を歩くのにも那の通り頻繁で且つ塵が澤山ある、其上知り人に出遭ひ、挨拶もしなければならぬ、コンナ面倒もある、それでは本當の外氣の運動にはならない、外氣の運動と云ふものは、思ひの儘に自分の行きたい所へ行き、休みたい處で休み、服裝なども隨

意な物を着て、新鮮なる空氣を吸つて、隨意に散策をしなければ効能はない、然るに東京ではそれが出來ない上野や日比谷の附近の人ばかり病氣するものではない。之に就て一面には東京市と云ふものをモツト改良して衛生的に此市街を拵へて貰ひたいと云ふのが吾々の希望でございます。

東京には近い所に鎌倉とか其他の相南地方の遊ぶに適當な所があるから宜しいですが、少くとも其所まで費用をかけて行き得る人は宜いですが、其以下の人に至つては、外氣運動が必要としてもそれをすることが出來ず、一ヶ月で癒るべきものが忍んで東京の如き混雜な所に居つて病氣が癒らず、其結果として業務も執らず遊んで居つて冗に月日を費やして居る、是は大きく申せば國家經濟の上から大なる不利益である、一日も早く病氣を癒して業務に就かせるのが國家に取つて必要な事であります、それには相當の散策する場所、上野とか日比谷程でなくとも澤山に拵へて呉れなければ、吾々は充分に衛生を守ることは出來ないです。

尚ほ私の子供の恢復期に就て少し申し上げたいのは、急性の肋災膜、殊に小兒のは性質が宜いのですが患つた、所が一週間か十日にして熱が取れた、胸の障りもなくなつた、外形には食事も進み、亂暴もするし、一見健康者と違つて居ない、所が能く〳〵叮嚀に診察をすると、奥の方にまだ惡い所が見える、玆で少し吾々が衛生のことを學びたいと云ふのは、斯う申しては如何ですが、素人では是で癒つたと思ふに違ひない、食事も進み、活潑に運動をして、熱もない痛みもない、一見健康である、此の際に若し之を健康として東京に置き學校に通して不攝生でもしたならばそれこそ大變である、幾干もなくして再び其病が起るのであります。是が貴女方の御家庭でもです、醫者が時々そう云ふ事を能く發見して忠告をする、まだ快くない、成程見た所は御壯健だが、まだ微かに殘つて居る、斯う醫者から忠告をされた際に、どうも素人は信用をしない人が多いです、何

か醫者が大仰な事を言ふ樣に受けとる人はあるのです、又醫者も必らず神聖な醫者ばかりとは保證は出來ないけれども、私は醫者と云ふものは神聖なものとしてお話をする、誠實に其事を忠告をしても眞に受けぬ、信用をしないで、療養をしない夫れが爲めに恐ろしい病氣を後に殘すことがあるから、是は宜しく注意を願つて置きたいと思ひます。次に腎臓病と酒と云ふことに就て申上げます。私はまだ兩親を持つて居ります、私の家庭に於ては自慢すべきものは何にもない、地位も無し金もありませず、是と言つて世に誇るべき點は一もありませぬが、玆に只一つ大きな聲をして世の中に威張る事がある、何かと云ふと兩親健在、父は八十一歲、母が七十六歲、是だけは私の家庭の飾物で、大いに誇るに足ると思ひます、所が老父が三年前に患ひましたのが、腎臓病です、是は老人に能くある病氣でありまして、萎縮腎と稱へて、之が爲には隨分命を失ふ人がある、それに私の父が患つた、例の如く友達の醫者を頼んで診察を乞ひ、自分でも力の及ぶだけやりました、所が幸ひにも癒つて、以前に優つた身體に復して、何時まで生きるか知れないほど健康になりました、病氣の際に彼の友達の醫者が親父に向つて斯う云ふ事を宣告した、元來父は酒を能く飲みました、壯年の時分にはナカ〳〵能く飲ましたのが、年を老るに從つて自然量が少なくなつて來ましたけれども、何方かと云ふと酒は飲む方である。處が醫者の方から申しますと云ふと、腎臓病には酒は殊の外宜くない、處で醫者の宣告には「貴所は酒は當分飲んではいけません、それから辛い者を召上らぬやうに」、斯う云はれて心得ましたと返答した、處が親父は田舍の一草醫でありますけれども、兎に角孔孟の敎で修養しただけあつて噓と云ふことを八ケ間敷戒めて居る人ですから、其當日から酒と云ふ酒は素よりです、酒の氣のある奈良漬の如きも絶對に口に入れない、辛い物はと云ふと唐辛は申すまでもない、大根卸しも辛いものに違ひないからいけないと

云ふので一切辛い物を斷つた、病氣が其後間もなく癒つて田舍へ參つて居つたが人が少しはよからうとて幾等勸めても前に戒められた醫師に逢ふて許されない以上之を破れば即ち言を喰むに當るとて頑として却け通して三年後の今日に至つた。

それに就て吾々が學ぶべきは何うてございませう、元來養生と云ふ事は精神の健全な者でなければ成功はむづかしい、病氣も同じ事てす病は物質を以て、或は力を以てのみ滿足に治療し或は看護し得られるものでない、必らずそれに精神的の治療と云ふものが加はつてでなければ滿足なる結果は得られない、精神的に養生をしたのてなければいかん、唯形式的のものでは本當の養生は出來ぬのてあります、昔から申します通り病は氣から起ると云い、昔漢法の醫者の本などに萬病皆氣より生ずなどと申しまして、氣と云ふのは精神と思へば宜からうと思ひますが、自分の精神の爲に往々病氣を起すものてす、例は幾らもございますが、女は少し心配すると乳が出なくなつたり癪を起したりする、それが極端まで走つて行くと立派なる病氣が起ると云ふやうになります、果して氣の爲に病氣が起るならば、同時に氣の爲に病氣を癒すことが出來る、慢性の病氣を癒すに當つては先刻申した看護者の精神的の看護の必要なることは申上げた通りてありますが、其他病人自身の精神の持ち方に依て病氣が癒る癒らぬと云ふことが出來る不完全なる精神の病人は、身體は自分の物なのに拘はらず、醫者の目を盜み自分の精神を欺いて醫者には內證てなどと稱して不養生をするやからがある、病氣の治らぬは當然てす、であるから自分の精神の確實なものであつたならば、治療の効を奏することも又著しいものてあります、今申した私の親父の例は決して之を誇る次第てはありませぬが、頑固と云ふ毅然として動かざる精神が此病氣を癒すに有力なることを證據立てた丈けてす。

それに就て斯う云ふものを御目に掛けたら、倘ほ御記憶に殘らうと思つて持て參つたので掛軸てす、

是は有名なる佐藤一齋先生が書いたのです、小藥是草根木皮大藥是衣服飲食藥原是治心修身と云ふので、是は何でもないやうだが、實に卓見なものであると深く私は敬服して居る、草根木皮即ち飲み藥を以て身體を補ふと云ふことは抑も末のことである、それより尊い藥がある筈だ、それは何かと云ふと大藥是衣服飲食です、玆で藥と云ふのは廣い意味の藥て衞生の事です、藥ばかり浴るほど飲んでも癒らん、身體は强ならん、衣服飲食に注意をしなければならぬ、さうするには何であるかと云ふと其大原是治心、修心であつて精神が好く修養せられて坐治進退規則正しく修て初めて功を奏するのであると云ふことを申されたのである、是は實に此の通りで、今日何所まで學問が開けても、吾々の身體は肉體と精神とより成て居り肉體を支配するは精神である、支配者が薄志弱行では迚も健身强軀は覺束ない、健全なる精神は健康なる肉體に宿るとは昔より言はれますが私は更に健康なる肉體は健全なる精神に隨ふと斷言します。

私の父母に就てモウ少し申上げたいのは、先づ兩親とも長壽と申して宜い、父は八十一で母は七十五て先づ世間並から云ふと長生の方であらうと思ひます、所で此長壽と云ふことに就て吾々の方でも色々研究がございますが、チョイト申上げて見やうならば、必ずしも金殿玉樓に住んで、美服美食をするから長壽をすると云ふものでない、茅屋に住んで粗食を喰つて居る人にも隨分長壽がある、それから衞生法と云つて何か特別な衞生の修養でもある人が長壽をするかと云ふとさうでもない、是は偶然もありませうし又は、天然强く生れて來て長壽をする人もありませうけれども、大體から之を論じて長壽する細かな學理は今日擧つて居りませぬ、けれども或る標準だけは幽かに認められる、それは何かと云ふと、長壽する人は少くも壯年以後に於て必ず一定の規律があると云ふことは一律一貫、何の長壽者に當嵌めても其の通りである、反對を申しますと云ふと、壯

年以後になつて不規律の、順序のない生活をした人は長壽をしないと云ふのは事實である、三度の食事をするにも、時間を選ばず、或は分量に一定なく、亂暴な飲食起臥をする人は殆ど長壽をする資格がない、長壽をする人は必ず此事は言はず語らずの内に實行して居る、之を吾々に採つて模範としたい。

モウ一つは餘力、是は經濟學者なども能く言ふことでありまして、百圓の資本のある人が百圓で事業をすると失敗する、臨時の資とする爲に其所へ餘力を殘して置かなければならぬ、十圓の資本があれば、餘力を二圓か三圓取つて置いて七圓位の所で活動をして居る、それが一番肝腎な所で、順序ある發達が望まれる、人間の身體も正に其通りである、肉體を使ふなり精神を使ふなりに餘力を存すると云ふことは最も必要である、殊に長壽者を觀察するとさう云ふやうな傾向が見える、田舍の百姓の長壽は決して勉强をして餘力を貯へるのではないが、佛法を崇拜する抔にて精神の餘力を養つて居る、其他種々なる方法で精神の餘力を養ふ法が色々ある、それは何んな事でも人々の隨意で宜からうと思ひますが、殊に御婦人に適當な詩歌俳諧或は音樂美術等でありましやうから、如何なる御忙がしい御境遇の方でも、必ず適當の御樂しみをなされて精神に精神の餘力を蓄い長壽の法に適ふ樣にいたしたい。次には

○○○○
産婆の巧拙。是は御婦人特有の場合でありまして私方の實例を申上げますと云ふと、一は失敗に終り一は成功をしました、二つの例を私の家庭に於て經驗致して居るのです。其一は唯今から十五年ばかり前でございますが、其の前二人の子供を持つて居つた所が、二人共女である、實は男子を望んで居つたが、幸ひにも男子を得た、而も十分なる發育を遂げて、少しも缺點のない健康な男子です、私一家の喜こびは申上げるまでもない。處が生れて四五日目で臍の緒が落かゝる場合になつて臍の周りに怪しき赤い色が現はれて來た、注意して居りますと云ふと、二日三日經つと忽ち其所が一面に腫上つて、大熱が

出て、痙攣を初めた、是はまがふ方なき破傷風と云ふ殆ど癒る見込のない病氣て、此診斷が付いたら覺悟をしなければならない、實は初めて男子を擧て、此難病に襲はれたので落膽此上なし、やがて一週間目に歿しました、是が一つの實例てす。

　それからモウ一つは其後になりまして家内が姙娠をして產に臨んだが意外にも前置胎盤と云ふ恐ろしきものであつた、前置胎盤と云ふのは產科の專門語て、之が爲に非常に出血する、多量の出血の爲めに瞬間に於て母體死亡する人が多い、處が生兒は死にましたが、母は助かつたのです、之に就ては話があります、十五六年前第一の男の子を失つた際に私は東京へ參つて家庭を作つて、まだ間もなかつたけれども實は自分の大失敗てあります、世間に友達もあり相當な產婆を選ぶことが出來ない筈はなかつたのてすが、それを精選することを怠つた。私の懺悔話を致して貴女方の家庭に於てかゝる不幸を復びしないやうに申上げるのてす。產婆なるものが產蓐に取て最も大切なものてあるのに雇入たるのは全く舊式の產婆て學力もない熟練もない消毒とは何の事やらもしらない唯腰を擦り、子供が生れゝば之を洗だけて、何にも知らない產婆であつた、處が消毒不完全の結果で恐ろしい黴菌を其產婆の手からして確かに此の臍の緒に付けられたに相違ないのてす。だから產婆の巧拙と云ふものは、母子供の生命に大變關係を有つて居る極めて大切な事であるのです、それゆゑ產婆、醫者と云ふものに人命を委托する人は、能く〳〵吟味をしなければならぬと云ふことは御分りになるだらうと思ひます、サテ此の破傷風と云ふ黴菌は先刻申しました化膿や焮衝を起す黴菌と同じやうに何處にも居る黴菌て、一朝消毒を怠ると何處へても附く、彼の生れ兒の臍の緒などへは別して喜んて付くものです、此黴菌は土を掘つて試驗をすると何所の土にもある、東京には元馬車があつた、今は電氣になつたから宜うございますが、馬車の時分に馬糞を能く散して居つた、彼の馬糞と云ふものが、

此の破傷風に取つては恐ろしい媒介物であります、彼の馬糞の中には此の黴菌が澤山に居るものです然し近頃は電氣になつたから此の黴菌も幾分か少くなつたらうと思ひます。

それからモウ一つの前置胎盤が助かつたと云ふのは、曩に產婆の爲めに大失敗をして懲りました爲めに、產婆の選擇に專ら注意をして熟練で而も學力も相當にある人を賴むとが出來ましたものですから前置胎盤の如き危急のものを助かつたのは全く產婆の爲てある、前置胎盤は分娩の瞬間が生命の別れてある、所が產婆が其前置胎盤なる事を機敏に知つて早速適當の處置をした爲に、さしも恐ろしき所の大患にも拘らず命を救ふことが出來たのである、右の場合は一は大に失敗した大切なる子を失ひ失敗の結果產婆の選擇をなして、其代りに一は大危險大厄難を產婆の巧妙なる技術の爲めに免れたのです之は巧拙の極端である、初の不幸がなかつたならば後の幸いは得られないで妻を失ふ結果になつたかも知れません更に私一家の不幸なる病例があなた方の戒となり幸とならば所謂災を轉じて幸となすものです醫學は本來人の不幸に學んで人に幸を與るものです。

初めに申上げた通り自分の一家の見苦しき事實を申上げてさへ皆さんの御參考にすると云ふのですが、私は及ばずながら平素から左樣に考へて居る、彼の第一の男子が生れて間もなく死んだ時には大きに落膽をしました、けれども此不幸を利用して、どうか學問上に寸效を致したい此の子の死體を此儘捨るは實に惜い、豫て學んだ所に依ると、子宮と云ふものは純潔なものであつて黴菌が曾て居るものでない、產辱熱などゝ云ふものを起すのは、產婆其他の外物から來るので、外から持つて來て黴菌を附ける爲に病氣を起すものであると云ふことを知て居る、果して子宮が純潔なものであつたなれば、生れた胎兒も純潔でなければならぬ、其試驗には小兒の死體が究竟な材料である此子の冥福の爲にも試驗に供すべしと云ので、腸內に鍼を通して材料を取り、段々

試驗をした所が果して好い結果を得た、それは學問上の事ですから申上げませぬが、左樣に試驗をした後との死體は醫科大學へ持つて行つて献納した教室て標本にして永く備へられてあります。

申上げる事は是迄ですが、甚だ一家の私事を御披露をして御聽苦しかつたでございませうが、是が幾分の御參考になれば私の本意でございます、甚だ永い間清聽を煩しました。

（終）



●醫學士渡邊房吉氏には本會のため篤志を以て主筆の位置に立ち有益の記事を寄送せらるゝととなり學識試驗共に豐富なる氏の說話は本號以下の誌上に於て一段の光彩を添へうるべし

●女性の美

醫學士　渡邊房吉

昔から希臘羅馬の樣な全盛を極めた國々に神話として傳つて居る神々や天使達の姿を見ると、多くは皆裸のまゝの女性の像であつて、近代でも歐羅巴で最も進歩した美術國で尊ばれて居る美術品は、繪畫と云はず彫刻と云はず多くは裸體美人の像であります、日本でも山水花鳥のみを樂んで居た時代は漸々過去つて追々裸體畫の趣味が解せられる樣になつて來ました。神の作り給ひし乙女のありのまゝの姿、世にこれ程美しい者はありますまい、其衣服裝飾の如きは之れ只人間の技巧に過ぎない、取に足らぬ者てあります。そこで私の今お話申すのも此肉體上の美、即眞個の意に於ける美人の御話で有ます。

●美人の定義

これは一口に云ひ盡す事は出來ない、且又此意味は時代と風俗によつて、漸次變化して來ました、瓜實が廢れて圓顏が流行つたり、鐵漿を止めて眉毛を剃

らなくなつたりするのも其一例でしやう、大體昔は美人の意は常に消極的でありまして、丈の短い、腰の細い、手足の小さな、恰もお雛樣の樣な只飾物となるばかりで、朝夕爵々として居る樣なのが尊ばれる傾がありましたが、當時は大變其意が變つて來まして殊に女學生諸君の體格がよくて活潑な事は非常であります、其身丈と云ひ胴の太さと云ひ實に堂々たるもので、飛だり跳たりは愚な事、驅走でもテニスでも器械體操でも、柔道、擊劍、角力を取人もあらうと云ふ有樣で、體格は決して男子にも劣りません、夫を彼等は自ら生理的美人と稱して誇つて居られます、如何にも生理的には甚結構では御坐いましやうが美人としては如何でしやうか？。されどどの樣な體格を持た者が美人として誇るに足のでしやうか。

●美人としての要素

どの樣に美人の標準が變つても、美人の定義が改まつても何等の影響を蒙らない永久の美の要素を左に申し述べましやう。勿論身體全體の事を云ふので決して顏面の美をのみ說くのではありません、面が如何程美しくとも、片足が短かかつたり腰が屈つて居たり手の指が一本足らなかつたりしては誰も美人と云ふ人はありますまい。そこで先

第一、女性特有の美點を述べましやう、美男の要素と美女の要素とは自ら差があります、昔の草紙等を讀むと女性に近いて居る者程美男子の樣で、お七、吉三の繪等では何方がお七だか吉三だか分らないのがあるが、今の美男は決して其樣な者でありません。扨女性特有の美點は擧ぐれば盡きますまいが先主要なる點を申さば、

▲骨骼の清楚なる事、魁偉なる骨骼は美女を傷しません。

▲まるみのある形容、肩と云はず腰と云はず角立つて居てはいけない。

▲品よき乳房、年頃になつて乳房が大きくならず縮まつて居るのがあります、又あまりに長くなつて胸

に二條長く垂れて居るのもありますが共に美人の相てありません。

▲廣き骨盤、之れは嫌ふ人も隨分ありますが柳腰だの細腰だのと云ふのは昔の形容詞てあります、細腰に過たる人は子を得る望がありません、かくては美人とも申せますまい。

▲豊に長き黑き毛髮、髮が足らなくて他人の拔毛を入れねばならぬ人は美人とは云はれぬ、近來又西洋流になつたから少し位は茶色て縮れ毛なのも却てよいと云ふ人もありますが、之れは畢竟負措みに過ぎないてしやう。

▲腋毛の少なき事、餘り多く長くて外に出て居る樣なのはよくありません。

▲全身の毛の目立たぬ事、あるべき處は別としてあまり毛深いのはよくない、手足や口の上等に男の樣に毛の生る人がある、佛蘭西ては男と同く口髯を生して居る女があるさうてすが日本ては考へ物てしやう。

▲柔き皮膚、俗に鮫肌と云ふ樣なのは勿論。手足や面の荒れたのも美人の要素を欠て居る。

▲圓き頭蓋、角立つたり凹凸不平の頭顱は男子にしても餘り宜しくない。

▲顏面の小なる事、幅の廣い大な顏面は力士てゞもなくば餘り好いものてない。

▲眉毛高く走りて細き事、眉毛の高きは上品な相てあります、昔宮中の女が眉毛を剃つて其上の方に黛を畫いて居たのは此理に合つたよき風てあります、太き眉が眼に近く走つて居るのは下品て根性惡く見える。

▲下顎短き事、下顎細長く折曲りて前方に突出した者すらある、是等は醜いのみならず如何にも輕薄らしい。

▲頰と首の間自然に移り行きて優美なる事、下顎突出して首との境餘り明なるは美しい者てない。

▲首の周圍圓やかなる事、喉頭や胸鎖乳頭筋等がゴツ〳〵突出して居るのは甚目に附き易い。

▲腕關節優美なる事、手首が太くて角立つて居るのは粗野であります。

▲纖手と細指、最も人目に附き易い處で、面は白粉を塗り立てゝ居ても節立つた大な手で直に化の皮が現はれるのであります。

▲圓やかなる肩、肩胛骨と肩關節の釣合がよくて三角筋が適度に發達して居なければならん、あまり肩の張たのは女には不適當なのは勿論であるが、又肩の落ち過たのも見難い者であります。

▲鎖骨眞直にて細き事、第一肋骨の上に在て肩胛骨と胸骨とを連ねて居る骨であります、少しは彎曲して居るのが自然ですが、甚しく弧狀を作し又は太く節立て居るのは宜しくない、大體此近傍は注意を拂はない人が多いが中々目に附き易い所であります、日本服でも左樣ですが殊に洋裝をする時には胸の上方は露出するから、此邊に見苦し點が在てはいけない、若し瘢痕でもある人は外科醫者に御頼なさい、瘢痕を少くする事も出來るし、横の瘢痕を縦のものとする事も出來ます。

▲胸廓稍細く稍長き事、無暗に細長いのも見難たいが、太短いのは殊に醜いものです。

▲豊なる圓みある臀部、扁平にして小さく肉少きは宜からず、適當なる臀筋の發達がなくてはならぬ。

▲薦骨部に小窩ある事、腰部を後より見て臀肉の中間薦骨の部に窪の樣な小窩の出來るのは大變美を助くるものである。

▲圓く太き股、婦人が破瓜期に近づけば乳房が大くなると共に股の太さが著しく加はつて圓みが附て來る、之れの發達せぬ女は女性の資格を缺て居ると云はねばならぬ。

▲恥骨弓低くして鈍角をなす事、角立つて居るのは局部の美を損ふ。

▲優美なる膝の形、膝が太くゴツ／＼したり皺の多いのは宜しくない。

▲腓腸部の圓き肉附、こむらの筋肉が一つ一つ筋立つて見えたり、皮下靜脉がうねつて見えたりするの

は感心しない。

▲優美なる足關節、關節が太くて踝が無暗に突出して皮膚の色が變つて居る樣なのは下品であります。

▲足が乾きて細き趾を持てる事、てく／＼と厚い大な足に太い趾が附て、足の裏は脂て惡臭があつたりざら／＼に荒れて居たりするのは下婢の足である。

第二、適當なる發育營養生活健康等によりて得らるべき美點、

▲身體兩半の均等、體の正中線で切放して兩半が全く均等の者とならねばならぬ、手足から面や頭の形迄も一方が大かつたり長かつたりしては非常に目立つものであります、之れは被服裝飾の上にも餘程注意せねばならぬ、體の兩半を飾る物は二つ共同じ物を用ひ、一つしか無い物は中央に置かねばならぬ、羽織の紐でも帶留でも、ボタンでも皆正中線で合す樣に成て居る、ボタンが左へ行く時にはそれと均等にする爲に右には態々飾ボタンをさへ附けるてはありませんか。

▲體の重心が可成下方にある事、重心が上に行くのは其人が前後左右何れにか曲つて居る證でありなす、姿勢を正くして眞直に成て居らねばなりません。

▲體量普通なるべき事、重過るも輕過るも宜しくない。

▲皮膚滑にして彈力ある事、弛緩にして何處にても皺の寄て居るのは若い人には見惡い。

▲筋肉の發達一樣なる事、ある局所の某々筋のみ發達して其隣の筋肉は甚萎縮して居る等と云ふのは釣合がとれない。

▲全身の關節圓滑なる事、拮掘なる關節は優美なる運動を妨げます。

▲眞直な咽、釣上り遂たのは恐ろしく、下り過たのは滑稽に見えます。

▲品よき上唇、あまり厚いのや、上の方へ反り上つたのや、あまり短いのや皆下品に見えます、又兎唇

或はみつくちと稱へて上唇の裂けたのがありますが、之れは外科醫の手術を請はば治ります、殊に幼兒等では兎唇の甚しいのを其儘にして置ては醜形を殘すばかりでなく、かゝる幼兒には口蓋にも裂隙があるから、其爲に消化器、呼吸器の病を起して死に至る事があるから親達は注意して早く外科醫に託さねばなりません。

▲並齒の揃つて居る事、反齒だの亂杭齒だのは申すに及はず大さの一樣で無いのも宜しく無い、又金や銀をつめたり着せたりしたのもあまり誇にはなりません。

▲顔面一樣に圓みある事、顴骨が殊に突出してはお多福に似、前頭骨が殊に突出するとおでこになります、皆一樣の發達を要します。

▲細く高く眞直な鼻、面の眞中で最も目に附き易い處です、併し鼻の低い人は左程心配は要りません信用ある耳鼻科或は外科醫に御託しなさい、便利な世の中となりました、鼻の尖からパラヒンの注射をして見事高い鼻としてくれます。遺傳若くは後天性の梅毒で鼻の全く無い者も外科手術によつて鼻を作つて貰ふ事も出來ます。

▲圓き顎、二重顎は小兒にのみあるべく、尖つた顎は男子にても見苦しい。

▲脊柱の眞直な事、脊椎が左右に曲つて居る人、佝僂の人等に美人は無い筈である。

▲稍圓みある背、扁平な背、角立つた背は宜しからず。

▲腹部平にして圓き事、前へとび出た腹、下に垂れて居る腹、蛙の樣な腹などは皆見苦しい。

▲眞直な上肢、前腕が斜に附て居たり、肘關節が突出して居るのは下品である。

▲眞直にして長き下肢、餘り長いのも宜しくないが日本の婦人には殊に太短いのが多い樣であまり美しい者では無い。日本婦人は常に座る習慣があるから斯くなるのでありましやうが所謂すらッとしてありたきものである。

▲閉したる口と紅の唇、女に口をあんぐり開て居る者も少いから好いが唇の紫色に成て居るのは隨分見受けられる、之れは健康狀態の勝れぬ徵であります。

▲皺のなき顏面と靨、皺は老人には皮膚及皮下の組織が弛綏して褶が出來るのであるが、若い人にも常によく心配等して皺を寄せて居ると習慣になつて多く皺が出來ます、故に殊に寢前に面をしがめて其まゝ眠る事は慥に皺を增す一原因となるでしやう。又靨は口の兩側にある笑筋の作用て、此筋肉の發達して居る人には笑つた時に此筋肉の間に凹が出來て、それが外に靨となつて現はれるのてす。

▲色の純白なる事、色の白きは七難隱すと云ふ位だから之れは慥に美人の第一要素であるに相違ありません。女は一體男よりも色が白いのが常である之れは何故かと云ふに、實に婦人は造物主に感謝せねばなりません、婦人には槪して脂肪が多いからてあります、皮下脂肪は黃色てありますがそれが皮膚の下にあつて透通つて皮膚を白く見せ且光澤を與ふるのてあります、男でも脂肪の多いものは女の樣な色をして居るだから脂肪の多い處程美しい、股の肉の眞白て美しいのも此爲で、肥つた人には股の脂肪層殆ど一寸に近いのもある位てす。併し色が白いばかりては石膏像の樣で何か物足らぬ、白い中に何處とも知れぬ紅の色を呈して居る必要がある、それは血潮の色である、血液の循環の善いものにして始めて得られるのです。だから先第一に健康狀態を進めて脂肪を多くし、且血液の循環をよくする事に御勸めなさるが好いてしやう。

以上を以て先づ生なる美の要素は申盡しました次には此要素を與へたり奪去つたりする衣食住の關係や病氣の事を申しましやう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

●熱の話

醫學士　渡邊房吉

單に熱と云へば隨分廣い意味に使はれてゐるが、今私の申述べたいと思ふは色々の傳染病や中毒の時なぞに人間の體に發する熱のことであります。

此熱が如何にして出るか、又出た時には如何樣に之を處分すべきであるかに就て私は簡略に申して見たいと思ひます

（一）熱とは如何なる者を云ふか

之を少しく醫學的に考へて見たい

動物學の上から分類すれば人間の溫血動物に屬すべきもので、病氣の時でなくとも常に一定の熱を體に持てゐます、即ち一定の體溫を常に保て居ます。

よく世間では凡ての物事を利害關係からのみ割り出したり、或は利己主義一點張りて少しも人情などを解せぬ人を見ては、かゝる人は定めしその體の中に溫かい血潮が流れてゐないのであろうと云ふので之を冷血動物などゝ輕蔑します、然しこれは學問上から云へば甚だ不穩當な言葉だと思ひます、何となれば冷血動物だと云ふて何も必ずしも冷い血を持てゐる動物のみてはありません、只その棲息して居る周圍の溫度に從てその自身の體溫を變化させるのであります、例へば印度のガンゼス河や亞非利加のナイル河などに棲てゐる鰐魚の如きは冷血動物ではありますけれ共、その體の中には人間よりも遙かに熱い血液が循環して居ります、之に反して溫血動物はその周圍の溫度には一切無關係で、健康である間は常に一定の溫度を保てをります、人間も亦實にその通りで體溫の時に或は鰐魚よりも低いことは有りましようが然かし外圍の事情に制せられてその體溫を變化させる樣な不見識なものではなりません、外には雪が降て居ようが花が咲て居ようがそんなことには少しも關係なく、常にその體溫は一定してあります、即はち攝氏の寒暖計て平均三七度内外で、之が

普通健康體の溫度であります、勿論朝と夕とはその溫度に多少の差がありまして、朝は低く夕方には高くなりますが、その差が一度を越すことがなく、一日の平均が三七度內外ならば之は平熱と申して別に熱が有るとは云ひません、之より高く三八度とか三九度とかになりますれば熱があると云ふのは無論のことでありますが、卅七度よりも低くとも一日の中で朝と夕方との溫度の差が一度以上であれば熱があると云ふても閊なかろうと思ひます、糖尿病とて尿の中に糖分を多量に含て來る病氣がありますが、此患者は多くは三七度以內でありますが、然し朝夕の差は一度以上で病人は熱がある樣な感じがします

(二)熱の計り方

病氣の時に熱を計ることは非常に大切のことでありまして、熱を見て病の何處にあるか、又何の病なるかを判斷することの出來る場合も少くないのであります、それ故に看病する人などはよく此計り方及その時を委しく知て居る必要があります

熱を計るには檢溫器を用ゐることは分り切つたことてすが、病人の都合によりて色々の所で計ります、最も普通なのは腋の下に挾みて見るのですが小兒には之が出來ないことがあります、その時には腿の褶又は舌の下或は肛門、膣等に入れて計ります、何分間入れて置くかと云ふことは檢溫器によりて異ひますが通常のでは十五分間、近頃改良されたのでは三—四分間で計れます

食事の後或は何か神經を興奮させる樣なことの有つた時には熱が上りますから、計る前には成るべく靜かに心を落ち付け、又食事の前に計るのが最もよいのです、然かして計た熱は之を溫度表に書き込んで置くのてす

健康の人は平均三七度(腋下で計て)ですが肛門膣等にてはそれより〇、二乃至〇、五度位高いのです、又小兒は一般に高く、老人は一般に低い、委しく言へば

小兒は平均三七、五
廿歳前後では三七、二〇―三七、一九
二十歳より七十歳迄は三六、八
七十歳以上は三七、二―三七、三

尤も之は只平均の數で、人によりては同じ年齡でも多少の差はあります、又一日の中でも色々差があります

夜中の一時が最も低く、それより朝の九時迄は少しづゝ上ります、九時から晝の十二時迄は下り、晝から又上つて午後五時と八時との間が最も高くなります、此間が一日の中で最も高い時です、此事をよく熱知て居て熱を計る時を誤らぬ樣に―又計た熱は温度表に付け込まねばならぬ、然らば醫者はその熱の表にあらはれた曲線を見て何の熱だか凡そ判斷することが出來ます

(三)熱のある時の徵候

熱が上れば身體の色々の機關に變化を來します

一、脈搏が增すことは通例です、若し熱が餘り高くなつて脈搏も餘り多きときは多くは惡い兆候で、病氣の重いことを示すのです、又熱が非常に高くても脈の增し方が割合に少い場合もあります、腸チブスの時などは多くそうです

二、熱が續けば呼吸が淺くなつてその數が增してきます、之は熱の爲めに酸素の消費さるゝ量が多くなり、從て呼吸の數を多くして空氣中から多くの酸素を吸入する必要があるからです

三、舌が乾燥してきて食物の味を感ぜず從て食慾は減退します

四、頭痛及眩暈がし又身體全部が何處となくダルくなり、時としては關節が痛み猶劇しくなれば全く知覺を失ひ或は囈語を言ふやうになります

五、尿水の排出が非常に減じ、又尿が濃厚なりますから茶褐色を呈するに至ります

(四)熱は何故に起るか

吾々の身體は一方に於ては適度に熱を製造し、又他の一方に於ては適度に之を失ひますから絕えず平衡

を保つとが出來て、常に三十七度の體溫を保てゐることが出來るのです、處が何かの原因で此平均を失ひ、熱の製造が增加してその發散する方が之に伴ふて增加せぬ場合には體溫は上る、即はち熱が出るのです

吾々の身體を組織てゐる細胞と申すものには絶えず新陳代謝が行はれてゐるが、之が或原因のため刺戟されてその作用が非常に高まり、酸素をとることは常よりも多くなり、炭酸瓦斯を出すことが常よりも少くなることも熱の原因となります熱を失ふのは、身體の表面から外圍の冷かな空氣の中に發散し、或は呼吸、發汗等により、或は大小便の排出によりてなされます、又熱が高くなる前には體がゾクゾクして所謂身の毛の彌立つことがある、之は寒の爲めに身體の表皮が收縮し、爲めに熱の發散が少くなり、益々熱が多く上るのだと說明されます

今身體を組織ゐる細胞を刺戟して新陳代謝を常よりも多くさせ、從て熱を上らせる原因は何かと云へば種々あります

一、體の中へ或る黴菌が入り、或はその毒が入れば熱を出すもので今化膿黴菌が入てそこが化膿とすれば、その細胞は黴菌の毒の爲めに刺戟されて、新陳代謝が盛になり從て盛んに熱を出します、然し之が破れて膿が外に流出して仕舞へば熱は下ります

二、腸の中に不消化物の腐敗せぬもの又は糞が蓄積してゐれば之が刺戟となりて熱が出ます、此時に下劑を服用で便通をよくすれば漸次に熱は下るものです

三、神經を刺戟しても熱は上ます、故に色々苦勞をし心配を重ねなぞすると熱の出るとがあります

此外熱を上らせる原因は色々ありますが、その中最も必要なのは黴菌及その毒によつて起る熱です、故に私は少しく之に就て申述べたいと思ひます

(五)生體と黴菌との關係

黴菌が人の身體内に入ればその運命は如何なるやと

云ふに

一、血の中にある白血球がそこに集つて來て黴菌を喰ひ殺します

二、或は白血球自身の體內に生捕にされ、その中にて漸々衰弱して遂に外に出る力を失ひ、或はそこにて死するに至るのです、元來白血球と云ふものは色々の役目を持てゐるものでありまして、時には身體の各所を單獨にて次へ〳〵と巡廻するものがあり、その巡廻中に若しも見馴れぬ黴菌がウロ〳〵してゐると直ぐに引つ捕へてその本營に連れて行く、そこで色々と吟味して若しも病氣を惹き起す原因となる黴菌であるとするとすぐに之を喰殺して仕舞ふ、然しながら若し此の黴菌が勢ひ强く、數も多勢であるときは思ひもかけぬ叛亂を起し、白血球が何程必死となつて奮闘しても之に敵することは出來ず、人體は遂にその黴菌の侵す所となりて死する樣なこともあります

三、血液自身の中にも黴菌を取り殺す力がありま す、それ故に外より病源菌が入り來る時には先づそこに白血球に血液等が集まつて來て黴菌との間に大戰爭を起し、互ひに火花を散らして奮闘するので熱が上るのです、集り來る白血球が多くて黴菌の抵抗力も强ければ夫に從つて戰爭も一層劇烈になり、熱の出るのも一段と多くなるわけです、此時黴菌の力が足らず、其軍勢も多くないとすれば黴菌軍は直ちに敗軍して、その人は一日か二日の熱て事もなく癒て仕舞ふのですが、若し不幸にして黴菌の勢力が侮り難く、恣に侵略を逞ふする時は白血球はうち敗れてその人間は衰弱し、或は死んで仕舞ふ樣な運命に立ち至るのです

世間で「鬼のカクラン」と云ふことがありますが、平素達者な人は病氣になると却て甚だ弱ることがあります、特に風を引た時には人一倍の熱が出て非常に苦しむのですが之も亦前に述たことで說明が出來ます、常々丈夫な人は黴菌が入ても白血球の抵抗力が强く、從て戰爭が大きくなり、その結果熱が多く

出ると云ふので、結局その人が病氣に對する抵抗力の多い證據です、それ故かゝる人は一時は熱が餘り高くて苦しみますが又癒ることも非常に速いものです

さて以上の理由で熱が上るものですが、この熱が上ると云ふことはその患者にとりて非常に幸福なことであります、何故かと云へば多くの黴菌は通常の體溫即ち三七度位の溫度の處で最も盛に繁殖することが出來ますが、熱が高くなれば繁殖が妨げられ遂には死するに至るからです、故に人の體內に病源菌が入れば自然に熱が上る熱が上れば黴菌は死ぬと云ふ順序で、人間の體は自然に之を防禦する仕掛が備はつてゐるのです、實に之は自然の惠として大に感謝すべきことです、それを少し熱があると云ふて直ぐに解熱劑を服用すると云ふのは、自然の惠を蔑視してゐる道理にはづれた仕方と云ふべきであります

(一八)發熱に對する處置

熱と云ふものは上に述べた色々の理由で起り、又色色の効能も有するものですから、熱の出た時にすぐに藥を服用て之を下げるのは不都合なことでありますが、此外解熱劑を與へると却てその爲めに白血球や血液が黴菌を殺す力を減殺する恐れがあると云ふ人もあります、外科の施術の後に熱の出ることも屢くありますが多くの場合に解熱劑を與へません、只餘り熱が高いと胃の作用を害し、腸の吸收を惡くし、其他色々他の機關に碍害を來すことが有ますから、その時には止を得ず解熱劑を與へるのです

然かしこゝに注意すべきことは解熱劑の効用であります、病氣で熱の上た時に之を內服すれば熱を下ることは出來ますが、然かし決して病氣の根源に入て之を治療することは出來ないのです、それ故に解熱劑を用ゐて一時その熱を下げることは出來ますが、病氣は依然として元の通りです、その藥の働がなくなれば復た熱は上ります、加之解熱劑の種類によりては心臓を害し、又は神經に害があることもあります

醫者が之を用うるのは只適當の場合に適度に之を用ゐて熱を下げ、他の機關の機能をよく保たしめ、從つて身體の衰弱を防ぎつゝ、一方に於ては病の根源を治療するのです

只マラリヤ熱の時に用うるキニーネと云ふ藥は。熱を下げ、或は熱の出る前に之を用うれば熱の上ることを防ぎ兼ねて病氣の根本を治療し得るのです、かかる藥は特効藥として非常に珍重さるゝものですが、何れの病氣にもかゝる特効藥があると云ふ譯ではありません

若し病氣の數だか特効藥が發見されて有たら實に好都合のことですが悲ひ哉今日ではかゝる特効藥は實に僅少のものです



東京出獄人保護事業第十年報

主管　原　胤昭

光陰如矢、恐多くも本日は英照皇太后陛下第十年御祭日とはなりぬ、崩御の際發せられたる大赦令により一時に赦免せられし出獄人を保護するの急を要せられ設立したる當保護所は、爰に第十年報を公にし謹て大赦恵澤の一斑を報ぜんと欲す

大赦當時全國にて減刑せられし者は實に一萬三千五百八十五人、東京府下に於てのみ當時赦免せられしは六百九十一人、爾來減刑囚人は追年赦免せられ、今や至仁に感激し罪心を飜へし、正業に就き新生涯に入り、赦恩に澤ひつゝある者夥多あり、其一斑當保護所の成蹟左の如し

被保護出獄人		八百六十五人	内	男	七五二
				女	一一三
罪名	強窃盗	六五八	殺傷		六四
	放火	三八	貨幣偽造		四
	賭博	九	賣淫		七八
	浮浪	一四			
犯數	初犯	三二六	再犯以上		四五九
	十犯以上	六六	數十犯		一三
	百犯以上	一			

成績	男	女	計
保護中のもの	四七	八	五五
府下居住の自活者	一五五	二三	一七八
地方居住の自活者	二五二	三一	二八三
死亡したる者	七三	二	七五

	男	女	計
轉住後所在不明の者	一一九	二二	一四一
保護所より逃亡の者	三六	一四	五〇
保護所を離れたる後再犯の者	七〇	一三	八三
計	七五二	一一三	八六五

良成績　十分の七　不良成績　十分の三
現在自活者　四六一
內妻帶せし者　三三八
擧けたる子女　一五五

如上の被保護人は赦恩に係りし者と係らざりし者とあれども、總じて赦恩に係りし長刑期囚人は其成績良好なるを確認せり

然るに大赦後一二年間に於て、赦免出獄人の成績不良の世評あり、當時予は甚だ之を遺憾と思ひたれども、未だ公に抗論すべき證跡を有せず、止むなく默したり、元來此事たるや先づ察すべきは減刑期間に多少ありし事なり、恐れ多き次第なれども等しく恩赦とは申作ら、短きは數日乃至數ケ月の者あり、自から謝恩の念に薄かりしは又人情止むべからざるものならん、彼等は減刑せらるゝも減刑せられざるも、再犯する輩なりしな、之に反し出獄の期限無かりし、懲役終身無期有期徒刑者にして、二年乃至三年以上の減刑を受けたる者は、從て謝恩の感覺厚かりしなり、此の輩にして當所に保護したるは特に便るべなき數犯の徒輩多かりしなれども、不良成績に陷りしは比較的少かりしを以て見るも、親戚故舊の存在援護せし者の良成績を得たるは、疑無き事實なり

左に二三の實驗を報示せん

▲犯罪の多くは青年血氣の時にあり、此より長刑期を受けて十有餘年を經、人間自然の熱逆期壯年に至りし時の減刑期なりしにぞ、此の光陰は人生最貴の時代なりし故予は良成績赦免人の口頭より屢々左の言を聞けり

私の生涯に取て此の減刑期の光陰ほど貴重なる賜は無かりし此時をして有益に勉強せし結果、今日の新生涯あり、大赦洪恩一日も忘れ難しと

又良成績赦免人に赦恩を體認し毎年一月十一日を以て新誕生日と名附け赤飯を焚き神棚に供し家族と共に之を紀念し來る者あり

又強盜殺犯懲役終身の赦免人に○○治郎吉なる者あり、出獄後便るべなく、當所に保護を受け正業に就き、京橋區新榮町一の五に居住し、稍職を營み妻を迎へ、銀座基督教會に屬し、信神に厚く、欣然として生活しつゝありしが、不幸にも出獄六年後病沒せり次郎吉永眠に臨みて殘けたる古き一小軸を予に遺物とせり、一軸を繙けば白木綿に「辛未第三十六號○○治郎吉」と墨書せる布札を表具せし掛物なり、是ぞ治郎吉が入監中獄衣の襟に縫着せられし囚人番號札なり、赦免の際混雜して下附書類の間に挿まり居りて、御偶然手に入りしを治郎吉謝恩の意に厚きより、當時貴願の

肖像畫なるもの無きに非ざりしも、恐れ畏み之を手にせず、此布札を紀念物として表裝し、竊に之を神棚に揭く、點燈獻水朝夕謝恩の禮拜を爲せしものなり、赦免人の心事察し得て餘ありとや云はん

實驗上予は大赦の惠澤を確認す、愛は人の惡しきを念はず、人の罪を赦すは大慈善なるを認む、赦恩に澤ひし可憐の同胞が、朝夕に皇恩を謝し、皇室の萬歲福祉を祈り奉る念願は、神の嘉納し給ふ事と思へり

予は此觀察を有するが故に、當所保護出獄人の外、尙全國に涉り赦免人十年後の成績を調査し、監獄改良の一針を供せんと思望したれども、細かに事業の性質を考究し至仁の聖旨を體し奉れば、斯くして調査するは至當ならざるを認めたり、今にして此調査を爲さんとすれば、赦免人居住地の警察官によらざるを得ず、警官によれば內探とするも、彼等が十年前の非事を報ぜざるを得ず、然る時は之の爲には、彼が今日の地位信用を傷くる場合なきを保せず、思ふに殺傷放火强窃盜の破廉恥行爲を世の忌避するは當然なり、社會制裁の進步に從ひ、益す之を排斥するは社會の吉祥事たり、本事業は他の慈善事業と異り、假令其成績良好なりとも之れを公に示す能はず、之れに反し不良成績は一の逃亡、一の窃盜も悉く警察の手に掛り、所謂警察種の新聞原稿となり、原胤昭方の保護を受けたるもの云々と、忽ち紙上に登れども、良成績者に至つては之れを世に示して、前科者大犯罪者なりしと知らさば、交際者は如何なる感想をも懷ん、故に警察官保護主管者の外は之を知らずして可なり、故に不良成績は小微も顯著、良成績は大なる程隱埋するにより、其眞相は社會に認識せらるゝなし、當保護下の赦免人に就て記すも今は東京市中に在て軒を並べ、數名の雇人を使ひ商店を開けるあり、數名の職工を敎へ工業を營むあり、家作持ちあり、請負業者あり、其家庭には妻あり子あり、多きは五人四人の子持ちあり、今にして之れに主人の舊非を知らするは何の用かあらん、殊に其愛らしき子女に、父が此の醜點を知らしむるは忍びざる事なり、斯くして其人を抹殺するは、豈に大赦

至仁の聖旨ならんや故に茲には當保護事績をのみ擧げぬ、併し事業の研究上又は同情慰問のため、其人に親交するを望まるゝ有志諸君には何時にても予は喜んて其人を紹介すべし、既に年來の間には研究上學者教役者又は同情諸君の訪問せられし事多々ありしなり

出獄人保護事業は有要の社會事業なるも、計畫せらるゝもの未だ甚少きは遺憾なり現今全國に設立するは卅八年末調にて三十八ヶ所なり、内一年内に新被保護人數の最多は當所の百十五人、之に次て救世軍の四十二人、廣島の三十一人、次は二十人以上、三十人以上八十人以下の者二十四ヶ所而て其創立は大赦以前に九、大赦當時に二即ち當所と三池、其他は三十一年以後の者なり

幸に當所は大方の賛助を蒙り、大赦當時設立し、胤昭の十年間八百六十五人を保護するを得たり、唯胤昭の主管不束にして、諸氏の芳情を空くする事多きを慚愧す、殊に戰時御多端の際、聖上　皇后兩陛下の厚き思召を以て、多大御下賜金の榮を蒙りたるは、誠に以て恐懼に堪へず益以て勵精斯業に盡し、聖旨に報じ奉らんのみ

十年間之を經營したれども幸に保護下の出獄人等能く勸勉し、自働自活の道を取りしにより、收金は左の如くにて足を得たり

入	寄附金	二〇、一六五、七四五圓
	雜收入	四、一〇二、九六〇
	現金	四五、七七二
出	基金（指定寄附）	一、四四〇、〇〇〇
	事業費	二三、七八二、八三三

如上事業費の内建物機械等現在約一萬圓の財産あり、由て消耗したる事業費は、平均一ヶ年約千二百圓なり、勿論業務は妻兒の補佐を得て、胤昭之に當りしのみ、一事務員も置かず、天佑は胤昭に賜ふに健康を以てせられ、十年皆勤、幸に一日も病臥せず一回の診察を受けず、十年を一日の如く働きたり、胤昭不敏何事も爲し得ざりしが、唯だ一事、一生懸命、此の可憐同胞に諸氏の芳情を分ち與ふるの務を執り得しは、胤昭の深く感謝する處、爰に謹んで本事業の概況を報じ奉る

泣子の取扱方

醫學博士　瀨川昌耆君講話

▲母親の練熟と氣轉　哺乳兒時代の小兒が頻に泣いて母親を困らせる事あるが夫れを賺して慰さめる仕方は母親の熟練と機智が肝腎です、總て小兒は一つの方法ばかりて慰めて貰ふのは餘り好まない、所謂目先きを新しく換へなければ直に倦きて仕舞ふものです、例へば泣いて居る時平生小兒の氣に入つた玩具の犬を見せ「ワン〱」と云つては遊ばして見せて遣ると小兒は一時泣くのを止めて其犬を見て居るが何時迄も永く見せて居ると倦きて來て又ワーッと泣き出します、左もなくば犬を見ないで他を見廻しなどして新しき物へ目を留めます夫れ故小兒が同じ玩具ては倦きたか何うかを觀察するは大に母親の熟練と機智を要する事です、犬が厭きさうなら今度は護謨人形を取換へて見せて遣るとか、座はつて遊ばして居たのを抱き上げて立つて遣るとかして御覧なさい爾う火の付くやうに泣いて居るものではありません、夫れを何うしても泣き止まらぬやうであつたら必ず小兒の身體に故障のあることゝ心得て貰ひたい、要するに世間の親達を見ると小兒の遊ばせ方即はち慰め方が誠に下劣なやうに考へますから哺乳兒時代の小兒にはモウ少し氣轉の利いた遊ばせ方をさして遣りたいものてす

▲慰め方の悪い例　又哺乳兒時代の小兒の泣立てゝ居る際、幾ら賺しても默らぬと却つて母親の方が自烈て道理も知らぬ小兒を叱つたりする事を見受けますが隨分此樣愚なことは無いではありませんか、既に母親からして先きへ怒るやうては小兒に機智の利いた遊ばせ方の出來るものてありません又或る母親抔は小兒の烈しく泣きますので夫れを慰める爲め鈴の玩具抔を振つて見せて遣るが、小兒は夫れを見て默ればこそ、益々自烈て泣き立てる、スルと其母親は益々強く鈴を振つて見せ遂に小兒の耳元まで持つ

て往つてガラン／＼音をさせる泣く時は神經の興奮して居るもの故烈しく鈴を振つて見せるより寧ろ靜に輕く背でも叩き守唄でも唄つて遣る方が優つて居ると思ひます

▲甘へ泣きは惡い癖　哺乳兒時代を經過してハヤ幼稚兒時代の初め頃からは小兒が稍もすると惡い癖に染るので餘程親達が注意を嚴重にしないと直に其の癖が付いて仕舞ひますから一寸も眼が離されません斯うなると小兒が甘へ泣きをするので自分の氣に入らぬ事があれば直ぐに泣いて自烈るし、慰めても教えても聞かばこそ益々烈しく泣立てます、小兒が幾ら泣いても構はずに置けと云ふは斯る場合を申すので、親達は勿論誰も構はずに置けば小兒は據ろないから自分から早く泣き止みます、爾うして泣き止んだ後て、親は眞情を籠てお諭しなさい追々と甘へ泣きする惡癖を矯正することが出來ませう

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

●痙攣る小兒

▲全身の筋がひきつけらる　私の病院などへも度々參る事ですが「唯今小兒が痙攣ましたから至急來診下さい」と狼狽して使の者が參ります、痙攣る事は小兒によくありまして痙攣るのが病氣と云ふのではない、之れも即ち徴候で御座います、種々の病氣から小兒は痙攣るものですが、何うして小兒には斯んな徴候のあるものかと云ふに之れは精神を抑制する力が未だ發達しませんで興奮する機能の方が勝つて居るから、種々の病氣からして遂に痙攣る次第になるのです、痙攣るときは御承知でもありませうが人事不省になつて總て全身の筋がひきつけられるのであります

▲痙攣る原因　痙攣る事の原因となる病氣の中で尤も小兒に有勝ちのは腸胃の疾患から來るのが多い、夫れが感冒を引いても痙攣る、熱が出ても痙攣ると云ふやうな譯でドーモ一度痙攣ると夫れが癖になつてしまるものです、尚小兒を高い處から落したりす

る時、例へば椽側から轉げ落ちたりする事がありませう之れは痙攣る原因となります、次に强い日光に頭腦を照らされることも其の原因の一ツとなります、總て腦に充血するやうなことがあれば痙攣ます原因となるから、斯ういふ狀態にならぬ樣な注意を致さなければなりません、ケレども此等は痙攣る內ても輕症の方で、眞正に腦に故障があつて痙攣るときは尤も危險があります、即ち腦膜炎の如きは是れでありますが斯ういふ病症の鑑別は決して素人に分るものではない醫師の診斷によらなければ分るものではないのです

▲應急處置法　ソコで痙攣たときは親達の非常に狼狽するもので、醫師に使をよこすにも實に慌てゝ居るがソー驚きませんでも宜いので御座います、先づ痙攣たら取敢ず頭部を冷すのが肝腎です、決して慌てずに、醫師を迎へる迄は靜かに寢せて置いて氷なり、冷水なりで頭部を冷し、又冷水を面部へ吹きかけてやるのも應急の一ツです一時間や一時半位痙攣た儘に靜に寢せて置いても決して心配になるものではありません醫師が來て適當なる處置を施せば直きに輕快になるものです、尙次に腸胃の疾患から來る痙攣の事をお咄し致しませう

▲痙攣る事の說明　前號にも述べた通り痙攣ると云ふ病氣は無いので、是には即ち或る病ひの徵候が顯はれて人事人省になり又全身の筋が引きつけられ苦悶の狀態に陷るので御座います、前にお咄し致したことゝ聊か重複いたすかも知れませんが、痙攣る小兒は世間に澤山見受けますから尙ほ茲に詳しく申し上げやうと思ひますから其思召てお聞き下さい扨斯樣に痙攣る徵候を起すのは種々の病氣から來るので其の原因となる病氣は色々あります、小兒は神經を抑制して、鎭靜する力はまだ發達して居りませんが其代り興奮する方の機能は鋭敏に發達するやうな組織になつて居る、夫れ故風邪を引いて熱が出ても直ぐに神經を冒し非常な過敏になつて痙攣けます色々の傳染病の爲めに一時に熱が出た時でも其通り抱て

居て誤つて小兒を落すとか、乳母車を轉覆かへして落すとか、椽から轉げ落ちたりすると、非常に強く小兒の腦を刺激し、夫れが爲め痙攣ます、夏など强い日光に照された時のやうに總て腦に充血するやうな事があると又夫が原因となつて痙攣ます、併し小兒の痙攣る一番多い病原は腸胃病の爲めに起るので不消化物を多く喰べ夫れが一定の消化時間を經ても容易に消化せず、食べた現物の儘胃腸に停滯して居ると、小兒の薄弱な胃腸は夫れに堪えられぬ計りか食物が消化せず停滯する内に稍〻もすると一種の中毒作用を起し腦神經を冒して夫れが爲め俄はかに痙攣て仕舞ふのです、夏抔能くある例です、晝頃迄は快活に遊んで居た小兒が急に二時頃に痙攣て醫者を呼ぶやら大騷ぎするのは飲食物の不消化から起るのが多いのです、夏は御承知でありませうが胃腸の消化力が衰えて居るから消化機の弱わい小兒が不消化物(多くは果物)を食べると往々痙攣たりする樣な次第になります先づ小兒の痙攣るのは以上の病氣から來るのが分けて多いが之は同じ痙攣る内でも未だ〳〵輕い方です、醫者の診斷から云へば左程驚くべきてはありませんが玆に同じ痙攣る徴候を顯はして居て危險な病氣があります

▲危險な病氣て痙攣る　只今も申す通り腦へ充血するやうな事があると夫れが原因となつて痙攣ますけれど、之れは先づ輕症な方て、眞正に腦に故障があつて痙攣たことなら實に危險で小兒の生命に關係いたします、之は即ち腦膜炎で親逹の尤も恐れを抱かるゝ病氣てあります、併し小兒が痙攣た場合に「之は消化機を害めた爲か風邪を引て熱の發した爲か或は腦膜炎の爲か」と云ふのは素人には判然解らない之れは醫師の診斷を待たなければなりませんけれど毎日小兒を側へ置いて育てゝ居る母親が我兒の容子に依つて機敏に判斷を下す心得があつたなら痙攣る毎に腦膜炎てはあるまいかと心配して騷ぐには及びません(腦膜炎の徴候は後にお話し致します)

●痙攣た時の取扱方

▲痙攣た時の心得　扨痙攣たときの取扱かひ方てすが、第一には親達が心を鎮めて處置いたさなければなりません、親が狼狽して仕舞つては充分の手當が出來ません故遂に小兒の不爲となります、ソコで親は充分氣を落付けて後、先づ人事不省に痙攣て居る小兒は靜かな室に移し仰臥せしめ帶附紐抔堅く締めてあつたならば之を緩め着物を寛げ、氷とか或は冷水にて頻りに頭部を冷し若し氷嚢の持合せがあつたなら氷を入れて枕とし後頭部にあてがへば腦を冷すには尤も良き手段てす夫れのみならず前にも述べた通り面部へ冷水を吹懸けて遣るのも良い方法てす、只手足の冷へるのは宜しくないから足が冷えて居たら湯たんぽて暖めなければなりません、又大便の通じが無つた場合に幸に灌腸器の持合せがあつて平生夫れを仕慣れて居たら早く灌腸して大便を排泄するのは應急の手段として至極よろしいのです、醫者の來る迄は絶えず斯ういふ鹽梅になさい一時間や一時間半氣が遠くなつて人事不省の體に陷つて居ても驚くことも心配なともないと安心してお出なさい、醫師が來れば適當な處置はあるから、夫れ迄腦を冷却するが尤も大切であります只餘り冷やしすぎて手足まて冷えるやうてはいけませんから時々小兒の蹠に手を當てゝ御覽んなさい蹠のつめたくなるのは冷やしすぎる徴候ですからさういふ場合には早く頭の氷を取り除けなければなりません

●頭の禿げること　ＮＮ沙

其原因は黴菌てあろうと云ふことてあるが遺傳もあろうし神經作用にもよることてあろう今は其たしかなことは分らぬが獨逸の大家なるドクトルメイエル氏の説によると左の如くてある

是迄頭の毛のぬける原因は脂肪の分泌の多過きによると説いて居ッたが

脂肪ばかりてない汗の分泌の過多なるに原因すと云はれた

慢性胃腸などの病氣ある人の汗は毛の爲めに頗る有害なもので此毒を含んで居る汗が皮膚面に於てだん〳〵乾いてたまり〳〵して皮膚を刺戟し毛根は爲めに萎縮することが多いのである

其他の害としては長時間帽子を被むることはよくない軍人などに禿げ頭は多い又太りたる人にも多い是れは發汗の多い爲めであると

又食物の攝生によつても大關係あるもので餘り偏りたる肉食者の如き常に野菜の不足なる場合は毛髮を害し

又美食家暖衣、飽食家も又髮の毛の美を損し禿髮を早からしむと

其外飲酒家には禿髮の多いもので之れも發汗が一の原因となるであろう

兎に角不充分なる運動と偏りしたる食物とは體液中の硫黃分を減少すると稱へて居る皮膚病學者もある

昔しは硫黃劑の内服で毛髮を美しくすると云ふて用ゐた蓋し硫黃は毛、爪及皮膚の角質の組み立に必要な成分で且緩下劑ともなるものであるから理のないことでない試むべきことである

要するに通利のなきときは緩下劑を用ゐて排泄をよくし頭髮は男子なれば少くも一週間に二三度は刺戟の少ない藥用石鹼（綠石鹼の類）の如きを毛の地へ塗り溫湯にて洗ふをよしとす脫毛の盛んなるとき洗わず暫くは却て脫毛を多くするのである髮に油を塗ることは惡くない油は溫度を導くものであるから頭を冷やす効がある其他多少毛髮を養ふものである餘り刺戟のつよい毛はえ藥など矢鱈に付けると却て害になることがあるから注意すべきことである

●生物の壽命

人の壽命は百歲迄は一體生きるものであるが生存競爭の結果遂に壽命を短縮されるのであるといふ動物の中で尤も長命なるものは象、鯨の類で鯨は數百年の壽命を保ち象は二百年白鳥三百年鵞鳥百六十年龜

は萬年とは行かざれども百五十年も生活し人間にて隨分長命した人もある西洋てはジョーンロビン氏の如き二百歳に垂んとし近くは二六新聞紙上に顯はれたる百歳の翁なる吉見寛氏の如き實に鏗鏘たるものてある今同記者が其平生を尋ねたる記事は頗る興味ありて長壽の參考ともなるべければ左に抄錄することゝせん

百歳の翁

牛込區赤城下町四十七番地に吉見寛氏とて今年百歳の高齢に達したる翁あり目出度き新春の紙上に相應しければ茲に翁の談を掲ぐる事とす可し翁は舊幕臣多羅尾修理氏の二男にして文化五年四月七日江戸本町の邸に生る長じて同じく舊幕臣吉見庄左衞門氏の養子となりて吉見姓を冒したるが耳こそ聾したれ鏗鑠として壯者を凌ぐの觀あり翁の夫人は菊子と云ひ天保六年六月八日の出生にして本年七十三、一家は二女かう子明治六年五月廿八日生）孫娘義負との四人にて春 風徐に花の馨るが如き家庭の裡翁は豐に其老後を養ひつゝあるなり記者一日翁を其邸に訪へば絶えず片頰に笑を泛えて語るらく、自分が

▲好きな道　は若い時から武藝の内でも劍術が大好て直心影流を習ひましたから頭の骨がスッカリ固つて了つて若い人と鉢合せをしても負はしません、ハヽヽヽ、其時分一番愉快で有つたのは劍術が上達して先生に一本參つた時です、今日の樂は繪を描いたり書をかいたりして其を自分で軸に表裝したり屛風に仕立てたり其他は植木の手入や鷄を飼のです、一體長生をするのは物事に

▲苦勞しない　のに限ります自分は若い時から萬事に頓着せずどんな事が有つても少しも苦にしませんだつたよ、其から九死に一生を得た事も多く有りますが其中で最もよく記憶してゐるのは安政の大地震てす斯うやつて長く居りまするど隨分何代もお交際して居る方が有りますが現に勝海舟さんなどは五代前から御懇意てす

▲神佛への信心　てすか、其は「心だに誠の道にか

なひなば祈らずとても神や守らん」と申す歌の通り正直にして曲つた事は致しませんから別段信心などは致しません、煙草ですか、煙草は十八歳の時から砲術の稽古をするに就て危險が有ります爲めに止めましたが其きりもう用ゐません、先づ

▲好きな物　は植木ですな外國から薔薇が始めて日本へ渡つて來ました時誰も其を鑑別する人が有りませんでしたが自分が好きな處から其を鑑別しまして薔薇園と號しました之れでも日本では薇薔の元祖です、飲食物では酒も若い時は二合位は飲みましたが今では茶呑茶碗に一杯位を時々用ゐるばかり、然ればと申して甘い物はカステラを少々位は喰べますが辛い物は一切好みません飯は三椀と極めてありまして副食物は野菜より魚鳥の肉を好みます

▲外出の時　ですか、車には滅多に乗りません草履が嫌で下駄ばきです杖は今以て用ゐません、其に帽子が嫌で彼を被ると逆上て困りますものな、朝は六時には起きまして鷄と植木とを見廻り、晝は客が來て書畫を頼まれたのを書いたり人の書いたものを見たりするので夜は十一時に寢ますが其までは新聞や雜誌を見て居ります

▲耳の遠くなつた　原因ですか其はペルリが來ました時に神奈川の砲臺で大砲を發射しました時に鼓膜を破りまして其からだん／＼遠くなりましたが今日では人と筆談をして用を辨じて居ります云々

▲翁の書齋　の壁は額を以て埋められあり其中には東宮殿下御慶事の際松と鶴とを描きたるを獻上して賜はりたる褒狀を始めとし諸種の美術展覽會家禽品評會博覽會園藝會等に出品して受けたる賞狀尠からず殊に昨三十九年五月には上野に於て東宮殿下の御前毫揮をなし特に賞詞を賜はりたり

●防寒と飲酒

片山博士の談片に曰く酒を飮めば體温は增加するものと心得冬季には採温の一方法として飮酒する人多かれど體温は酒の爲めに增加することあらずして寧

ろ反って減少するを例とす大方の人は飲酒によりて面部、手足、胸、腹等の表皮に潮紅するのみならず一時確かに溫かみを感ずるより體溫の增加せしごとく速斷すれど事實は決して然らず如此皮膚の潮紅して溫かくなれるは飲酒によりて血管が擴張せられこゝに血液集注して自然皮膚の表面に近づくを以て潮紅と溫かみを感ずるなれと這は溫かき血が表面に多く來れる爲め皮膚だけが溫かくなれるにて體溫の增加せしにはあらず且つ却つて之が爲め皮膚の表面より溫を失ふこと多く溫度は此所より盛に放散して畢竟體溫の發生は增加することなきにその放散を多からしむるより醉醒の一層寒さを感ずるにて酒には決して防寒の効なきなり雪國の人は從來の實驗により雪中旅行に飲酒を戒めつゝあるが之れ學理に合する事實にして北極探險家の實驗によるも確に寒中飲酒の害は認られ居るなり云々

●運動過度の傷害

運動することは言ふ迄もなく極めて必要なことにて奬勵すべきことにてはあるが運動も餘り過度劇烈となりては却て身體の傷害を招くこと夥しく米國などにても昨年中ドクトルクーリン氏の調査せる處によれば其死亡數百二十八人の內五十人は運動傷害より起りたる死亡にして七十八人は種々の傷痍に原因せりと其疾患は多くは心臟病なりと之により近時ドクトルウエイル、ミワチエル氏は運動遊戲過度の弊害として決議案を設定せりといふ

(一)運動家は心臟病に罹り易く而して其心臟病は或は生理的肥大なることあり、擴張を兼ぬる肥大なることあり、心內膜炎なることあり、心筋炎なることあり又は種々の瓣膜傷害として現はるゝことあり

(二)運動家は肺炎を發したるときは死を致すこと多し蓋し常に心臟障害を之に併發すればなり

(三)運動家は傳染病に襲はれ易く且つ死亡に陷ること多し

(四)運動家の死亡原因中肺結核は頗る其多數を占む

(五)運動家の平均死亡年齢は普通の生活を營む者よりも遙かに短少なり

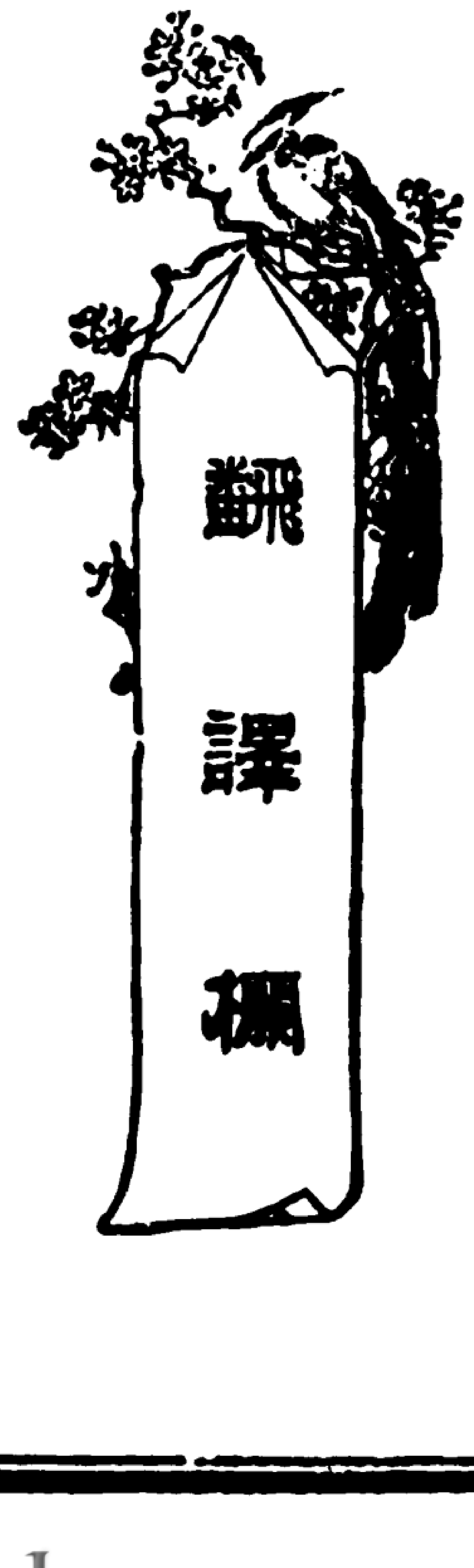
(六)千九百五年の遊戯季節中米國に行はれたるフートボールは悲むべき遭難及び致命の原因となりしこと極めて夥しく今や其危險を防止せんが爲め之に干渉するの必要は明白となれり

(七)廣く運動的遊戯の理想は人格を高尚にし勇壯なる男子を養成し出さんとするにあり決して不具者と罹病者とを增加し甚だしきは夭折者を生ずるの目的には非ざるなり故に過度の競爭は嚴に之を戒しめざるべからず

●東京市の肺結核統計

東京に於ける肺結核患者死亡を各區に分つときは淺草の七百四十一人尤も多く之に次ぐは本所五八七、芝五七一にあり詳細は次表の如し

	肺結核死亡者	人口に對する萬分比例
深川	四五〇人	五一・七
下谷	四九六人	五一・二
芝	五七一人	四九・六
本所	五八七人	四八・二
本郷	三三三人	四六・六
淺草	七四一人	四五・六
京橋	四七一人	四五・四
四谷	一六八人	四四・五
麻布	二一九人	四二・九
神田	四八四人	四二・三
小石川	二八二人	四二・〇
牛込	二四五人	三八・〇
麹町	一六八人	三七・七
赤坂	一一八人	三二・六
日本橋	三二三人	三一・三
計	五六五六人	四四・三



遺傳素因ある者の神經病豫防法

プロフエッソルクラフト、エービング述

Dr. M. K. 譯

神經の病氣に罹らない樣に豫防をするといふ事は何

人に取つても大切な事柄で苟も今日生存競爭の激しい世の中に立つて自己の神經の力を健全に維持して精神上の資本を保護しようと思ふ者の必らず心掛けなくてはならぬ事柄であります、

只だ神經病の素因ある人は其身體なり精神なりの攝生の上に就きて普通の人よりも一層細み入りたる細心なる注意を要するのであります一體神經病に罹るのは神經病そのものが遺傳せらるゝのでは無くして神經病に罹り易いやうな體質が遺傳せらるゝのであつて若干の時日を經て始めて眞の神經病が起るのであるから此間に充分豫防の手當を施す事が出來るそれ故神經病の豫防といふ事は極めて重大なる意義を有するのであります

結核病にありても其體質の遺傳せらるゝ事は神經病に似て居る此場合にありても小兒の時から衞生に注意し其體質に注意して職業を與ふる時は結核病の發生を豫防する事が出來るのであります

神經病以外の他の諸々の病は何れも多くの有害作用の合同作用で起る結果に外ならぬもので其恐るべき事を前以て知る事も出來隨て之を豫防する事も出來るそうして教育法であるとか生活法であるとか職業の撰擇であるとかいふものが間違つて居た場合には此等は充分に之を改良する事が出來るものである

神經病の素因あるものに就きて豫防法の行はれないのは一つは此れに對する公衆及び家庭醫の智識が無いが爲めに其危險なる事を識らないのと一つは家族の人達が自己及び其小供の弱き事を知らない結果である

神經病の素因ある人は神經病を惹き起す様な障害に對する抵抗力を高め且つ左樣な障害に遭遇しない樣に之を避ける事を勉むる時は病を未發に防ぐ事が出來るそうして此目的を達するには身體の攝養と正しき教育と職業の撰擇とが大切なる條項であります

而して身體及精神の衞生といふ事は極く幼い小供の時分から守らなくてはなりませぬ、すなはち人間一生の吉凶禍福の源といふものは小供の時代に存する

ものであります
兩親が神經質である時及び母が神經病に罹つて居てそうして貧血である時は其子に授乳してはなりませぬ
乳母の撰定には注意して適當の乳母を求め少く共九ケ月の間は授乳せしめ室の溫度は溫きに過ぎぬ樣浴湯の溫度も溫きに失せぬ樣注意するのが肝要であります
小供の齒の生へる時は極めて危險な事が起つて來ますから此時期には嚴重に衞生に注意し頭に血の上らない樣に氣を付けなくてはなりませぬなぜなれば頭に血が上つて來ると即ち充血すると小供はよく痙攣を起すからであります
小供の頭蓋の發育に就いては殊に注意を拂ひ若し顋門が永く閉ぢないとか後頭の骨が生後永く軟くて堅くならないとかいふ事があれば是れは佝僂病といふ病の徴候であるから直に醫士に診て貰つて營養の方法や處置抔を聞く必要があります

神經質の小供は田舍に置くのが最も宜しい或は海邊の空氣も宜しい而して強い精神の感動を受けるとか長い旅をするとか暑い目に逢ふとかあまり永くブランコ遊びをするとかいふ事は避けなくてはならぬ
早くから小供に冷水浴をやらせて身體を強壯にするのは必要であります
食物は滋養質に富んだ物を與へ茶、珈琲、酒類は嚴重に之を禁ずるのであります而して食物は混食と謂つて蛋白質と含水炭素と脂肪のあるもの即ち肉類と野菜類の混つたものでなくてはならぬ神經質の人や神經病の人には植物性の食物ばかりは良くない又肉類ばかりでもいかぬ何ほ強き消化力は望ましい事であるそうして必要なる蛋白質は植物性の食物（荳穀類）や牛乳、卵、肴及び獸肉抔から得られるのであります
赤酒は補血の効があるといつて之を多量に屢々用ふる人があるが之は間違つた考であるから全く禁じなくてはならぬ

小供の身體の發育に就きてはあらゆる注意を拂はなくてはならぬが、もしも注意を誤まると小供を弱くし憂鬱症や「ヒステリー」の原因を造るやうな事がある神經質の小兒は多くは寢付きがわるく又眠つて居ても少しの事でよく目をさますものであるがソンナ時に眠り藥抔を與へてはならぬ此場合には眠りに就く前に微温湯に入れて冷くて氣通の善い室に寢かす時はよく寢入ります、寢て居て夜中に目をさます癖のある小供は獨りで寢かさない樣にし且つ全く暗い室はよくないのであります

素因ある人に對しては殊に神經病の發生す時期に注意を拂ふ事は極めて肝要な事で少しでも身體に異狀がある時は例へば顏の色が蒼白である時は直に醫士の診察を受けなくてはならぬ又神經病の素因のある人は色情の發達が異樣に早く且つ强いものであるから此方面に向つては特別の注意を要するそうして此必要なる注意を怠るときは大なる失錯を來して不幸に陷る事が多い然らば如何にして此危險を未發に防ぐ事が出來ようか

之れには先づ肉感を挑發する樣な事柄は一切之れを避ける事を勉めなくてはならぬ多食するとか小說を讀むとか都會生活だとか舞踏をするとか早くから社交界に出入するといふ事は凡て惡い又嗜好品を多く取るといふ事も無論わるい凡て此等の害を避けて適當なる生活法を採り身體の運動を盛にし田舍に生活し盛に沐浴し冷水浴を行ふ時は身體は健全となり隨て身を潔白に保つ事が出來る

兩親及び小供の敎育者は少年が如何なる交際をして居るか下婢の行儀が正しいか否かに深く注意するを要する

女子が小供を寵愛するのを嚴禁し小供が一定の年齡に達してからは化粧を召使の者に委ぬる事を禁ずるが宜しい

あらゆる注意を拂ふにも拘らず他の小供の惡事を行ふ事が非常な影響を及ぼす事にも注意しなくてはならぬ今日の學校を見るに種々の不道德の事が屢々行

はれて居るのを見ても分る

少年に向つて色情並に之に伴ふ害毒を說き聞かす方が宜しからうか、今日の少年は遺憾ながら早くから色情の事を知つて居るそれ故彼等に向つて色情に關する話しをする事は面白く無いがさりとて有害なる惡習慣に陷つて居る者がある時は默して居る事は出來ないが多くの場合に害毒の說明をした所が既に遲く却つて有害な事がある（以下次號）



質疑欄

●●●●質問注意　質問中診察せざれば應答し難きものは一切解答せず又解答に遲速あるは取調べの都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみなわかりやすく認むる事●質問に姓名を出すことを好まざる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御報知のこと●本號の雜誌に登載する分は凡て前月十五日迄に申込まれしものとす●總て急ぎの分は回答せず

質問者　本鄉　一會員

問　不良の牛乳を飲用しますと結核病に罹ることがあると聞いておりますが其外尙傳染する病氣があるなれば御敎示を願升

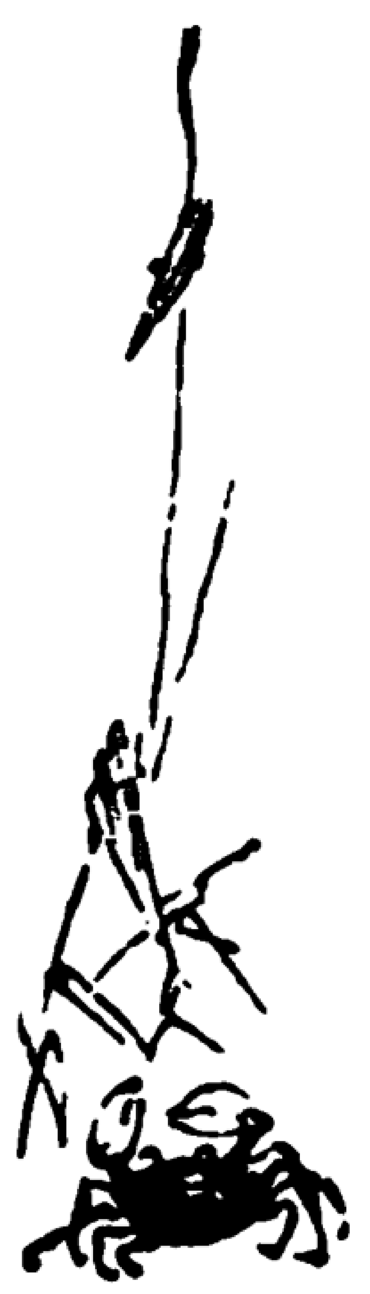
答　結核性のある牝牛の乳汁は結核黴菌を存するもので御說の通り人體に傳染することは確かです其他牛乳より傳染する病氣は猩紅熱脾脫疽、窒扶斯、痘瘡等であります

質問者　名古屋一會員

問　牛乳、牛肉、鷄卵、鷄肉及米、麥、の滋養分の優劣承知致し度御敎示願上候

何れも滋養物であるが一樣には言はれませんけれども牛乳は三、五の蛋白質三、六の脂肪四、八の抱水炭素八七、五の水分〇、八の灰分であります今之を鷄卵と比べて見ますと鷄卵は一三、〇の蛋白質一一、〇の脂肪七五、〇の水分一〇の灰分を含んで居ります蛋白、脂肪等は牛乳に勝つて居りますが鷄卵の方には抱水炭素が含んでおりませぬから鷄卵ばかりで牛乳の樣に身體を補給して行く所の滋養分の不足があります牛乳は兎に角過不足なき養分であるから小兒など

に尤も適當なる所以でありまス又た牛肉は油身を除きましたもの丶分拆によりますと二二、五の蛋白質四、五の脂肪七一、八の水分一、二の灰分を含んで居る之れは先づ上肉でありますが鷄肉で見ますと蛋白は二〇、〇脂肪四、〇水分七五、五灰分一、〇を含んで居りますから普通大した相違はないのですが多少牛肉の方優るのですソレから米と麥の滋養質ですか此前にも御質問の方がありましたが分析上から言へば小麥の方がよいので米は八、〇の蛋白質〇、五の脂肪七六、〇の抱水炭素一、〇の灰分一、〇の植物纎維素を含んで居るが小麥は一五、〇の蛋白六、〇の肪脂六四、〇の抱水炭素二、〇の灰分一一、〇の水分二、〇の植物纎維素であるから蛋白質に於て大に異なる處があるのです





雜報

▲寒冒の注意　駿河文部囑托醫の談に曰く從來一般に冷水摩擦等皮膚の練磨法のみ奬勵されつ丶あり之れ素より皮膚を健康ならしむる點に於ては大に必要なるに相違なきも此他に最も注意せざるべからざる一要點は咽喉の練磨法なり如何に皮膚の健康を保つも喉頭軟弱なれば風邪に罹り易しとのことなれば時節柄注意すべき事なり而して喉頭養生法の大切なる事項は

一、日本人は寒き時程熱き食物を嗜む癖あるも之は勉めて避くべし熱きものを食したる喉頭が寒き空氣に觸るれば風邪に罹り易し

一、一度咽頭に微患を覺へたる時は重炭酸曹達を百倍の水に溶解して咽頭を含嗽すべし

一、食鹽の含嗽は一般になされつゝあるも人によりてはカブレを生ずることあり寧ろ前記の重曹水の方可なり

▲昨今の流行病　舊臘よりかけての寒冒は其勢ひ猛烈にして新年になりて病人の死亡するもの甚だ多く何れの醫師も門前市をなすの有様なるが昨今又小兒に惡性の肺炎、肋膜炎、腦膜炎及肋膜肺炎等に罹るもの多く警視廳に届出の患者數は日々數十名に上るといふ

▲日本の死亡率　吳文聰氏の説に曰く『日本の死亡率中死産の數非常に多く歐洲にては三分前後なるに百二十萬中十五萬即ち一割に及ぶは人工的死産即ち墮胎の結果と云はざる可からず我國にても殊に高知千葉茨城埼玉の四縣多く高知にては二男一女の子ある者は墮胎するが正當の樣に思ひ居る外子多くては財産分配の率を減ずるとか老後の出産は恥辱なりとか色々の規則あり千葉などは死産の百分中六十は墮胎する爲め死産毎に警官が臨檢し姙娠と見る時は手帳に記けて出産迄監督するも尙墮胎をなしたる後は腹へ綿を詰置き飛でもなき時分に疾に生て他へやりましたなど胡魔化す者多し十五萬の死産中半分は墮胎と見るも取締の如何にて七萬五千宛の國民増殖を圖る道あり云々』

▲寒氣と眼病　例年冬季より晩春にかけて眼病者の増加する傾向あり其原因は多々あるべけれども著しく乾燥せる寒風の爲め直接に眼球に刺戟を受け又間接には鼻や喉頭を冒さるゝ爲め逆上を來して自然眼病を起すに至り且つ乾燥したる風は塵埃汚物を混じて眼を害ふものなれば寒中は常に眼の清潔を保つやう注意すべし而して豫防には水洗法を用ひ消毒藥を清潔なる水に浸し柔かき布又は筆にて洗ふべしとなり

▲昨年のペスト患者　昨三十九年一月一日より同十二月三十一日に至る滿一ヶ年間に於けるペスト發生數に付内務省衛生局の調査左の如し

大阪　百五十八名　兵庫　八十四名

長崎	三名	廣島	十名
山口	三十一名	和歌山	百八十八名
徳島	四名	愛媛	六名
福岡	九名	臺灣	三千二百五十六名

合計三千七百四十九名

▲戰時傳染病と脚氣症　過般戰役に於ける傳染病患者は何れの戰役に比するも少數にして其數僅か二萬七千百五十八人にして日清戰役には百人に付十四人の割合なりしも今回の戰役にては百人に付僅四人なりといふ又戰役中病者の過半を占めたる脚氣病は疲勞病なりしことを發見せられ今後の調査上大に便宜を得たりといふ

▲小兒と炬燵　小兒に毎夜炬燵を入れやるとは尤も危險なことゝて有害瓦斯は夜具の缺口より放散するが爲め之を呼吸して遂には急性腦膜炎を起すこと頗る多しといふ注意すべきことなり

▲醫會の名士逝く　傳染病研究所技師醫學博士淺川範彦氏は腦膜肋膜炎の爲め永眠せられ山龍堂病院長土屋醫學士にも又逝去せられたり醫會の名士を失ふ惜むべく悲むべきことなり



大日本婦人衛生會記事

●本會新年會景況

一月十二日第二土曜日午後一時半より例により神田區一ッ橋通共立女子職業學校に於て新年の互禮を兼ね開會し席定るや會長鍋島侯爵夫人には新年の辭を述べられ直ちに餘興を開始し桃川燕林の講談あり最初に高田の馬場の勇壯なる仇討を演じ次にハモニカの妙手なる茂木幸一君には公務多端の折柄篤志を以てマーチ二曲(一はケーニッヒカヽルマーチ)を吹奏せられしが僅か五寸に足らぬ横笛を口に立て巧に單音複音を分ち軍隊の行進より野戰砲聲の有樣など虚々實々眞に迫り其妙巧なる聽くもの感嘆せざるはなかりき次に本會より戰時中篤志看護婦會へ金貳百圓及豫備病院へ傷病者帽子多數寄附に對し東京府知事

より下賜せられたる賞狀及大小二個の木杯を會員に示して報告し又豫て宇都宮支會の爲め盡力せられたる前宇都宮支會長久保田夫人にも當日參會せられしかば鍋島本會長より謝狀を授與せられたり次に燕林の講談あり廣瀬中佐の外國に於ける角力談を演じ其滑稽なる顎のはずるを忘れしめ續いて尙一曲茂木氏に越後獅子を所望し喝采場裏に閉會を告げ會員一同に茶菓の接待あり相互懇談に時を移し歡を盡くして散會せしは午後四時半にして當日の出席は會員及傍聽者を合せ約四百餘名に達し頗る盛會なりき

當日出席の役員は左の如し

濱尾副會長、田村きよ子、高橋孝子、男爵夫人南部限子、岡田德子、會長鍋島侯爵夫人、鳩山春子、高木かう子、濱田捨子、三宅藤子、三浦政子、岸澄子、宮下咲子、(出席順)

●當日の寄附

一金五圓（密柑かわりとして）　鍋島　會長

一密柑　貳箱　濱尾副會長

一金壹圓五拾錢　幹事　濱田　捨子

●鍋島會長より授與せられし謝狀寫

本會宇都宮支會々長の任を負はれし以來大に會務の擴張を圖られ効績少からず今回御辭任に付謹て謝辭を呈し候敬具

明治四十年一月十二日

私立大日本婦人衛生會長侯爵夫人　鍋島榮子

久保田　不二子殿

＊　＊　＊　＊　＊

●東京府知事よりの賞狀寫

大日本婦人衛生會總代　鍋島　榮子

明治三十七八年戰役の際報國の旨意を以て東京豫備病院へ患者用品寄附候段奇特に候條其賞として木杯壹個下賜候事

明治三十八年十二月一日

東京府知事正三位勳二等男爵　千家尊福

因に記す本會名義の分も同文に付き全文を省く

宇都宮支會報告

●送別會及例會

今回久保田政周氏滿洲鐵道株式會社理事に榮轉せられたるにより同夫人にも支會長を辭任せられたれば去る十二月三日午前十時を期し日本赤十字社栃木支部内に於て篤志看護婦人會並に愛國婦人會及び婦人衞生會合同して送別の茶話會を開き幹事須賀榮子會員一同を代表して送別の辭を述べ久保田夫人の鄭重なる挨拶ありて非常に盛會なりしといふ。夫れより引續き同所に於て午後二時三十分より例會を開き講師望月醫學士精神教育の衞生に及ぼす結果と云へる演題にて熱心なる講話あり午後四時閉會を告げ解散せりといふ

●當日久保田夫人よりの寄附左の如しと

一金五拾圓　久保田不二子

因に記す十二月九日午前十時十五分發にて久保田氏任地に向て出發せらるゝに付會員多數停車場迄見送られしといふ

一宇都宮支會長後任　中山笑子夫人後任として當選せられしといふ

一事務所移轉　今回都合により支會事務所を左記に移轉せりと

宇都宮市傳馬町三十三番地　行森氏方

宇都宮支會

●新年會

一月十一日午前十時日本赤十字社栃木支部内に於て篤志看護婦人會愛國婦人會婦人衞生會合同にて新年名刺交換會を開く三會合同の事とて來會者非常の多數にて各々歡を盡し午後三時解散せりと

餘興

一福引　一蓄音器

一薩摩琵琶（中山會長寄附）

山形支會報告

●十二月例會

十二月八日午後二時より女子師範學校内に於て例會を開く來會者傍聽生共約五十名吉岡醫學士の産褥

熱豫防に就て懇切なる講話あり四時頃散會せり當日の役員出席者左の如しと

馬淵會長、佐藤幹事、佐柳幹事、館幹事、關屋幹事

新潟支會報告

●一月例會

一月六日午後一時より女子高等小學校に於て婦人教育會、帝國婦人協會新潟支會聯合の上新年會開催最初一同君が代の歌を奏し次に田村夫人開會の辭を述べ次に教育講習會講師富永岩太郎氏の兒童心理と家庭教育の關係に付一時間有餘の有益なる講話あり次に帝國、衛生、兩會を代表し高橋辰五郎氏の祝辭あり新年の歌を以て一と先式を終り左の餘興あり出席者約百五六十名にして頗る盛會なりしと

一講　談　　松林　蛾則

一彈　琴（春の野）（てふ遊）　某　令　孃

＊　＊　＊　＊　＊

本會入會者

○事務所申込

●京橋區日吉町三　通常會員　伊東　から子

○大學諏訪なみ子紹介

●日本橋區箱崎町四ノ一中島米方　通常會員　山本　花子

相州福島つる子紹介

●赤坂區臺町六十三　通常會員　楠田　ひさ子

○牛込渡邊仙子紹介

●牛込區矢來町三番地山里　通常會員　宮田　とく子

○近衛もと子紹介

●豐多摩郡千駄ヶ谷村五六二　通常會員　仙波　佐嘉子

○麹町青戸咲子紹介

●小石川區江戸川町一　通常會員　山本　とめ子

●宇都宮支會入會者

○柴田副會長紹介

●仝市二條町　通常會員　倉田　うめ子

○稲井よし子紹介

●仝市本郷町　通常會員　上野　たみ子

●足利郡足利町　通常會員　武居　つる子

●仝市一條町　通常會員　笠井　けい子

○中山評議員紹介
●仝市松本町　通常會員　渡邊とみ子

○石田幹事紹介
●仝市川向町　通常會員　本田よね子

○向井評議員紹介
●仝市四條町　通常會員　望月ふさ子

○高崎歌子紹介
●仝市福田町　特別會員　中山笑子

○支會申込
●仝市上河原町　通常會員　田中すみ子

●同支會員變更
●通常會員改め　特別會員　笠原小常子
●通常會員改め　特別會員　福野まつ子

●改姓
阿久津改め　加藤いと子

●新潟支會入會者
○澁川たま子紹介
●新潟市旭町四十九　通常會員　岡上ふく子

●本會々員改姓名
●通常會員三瓶千枝子改め　鈴木千枝子
●通常會員南部靜枝子改め　南部泰子

弔詞

本會々員北澤信子の君には嘗て本會の爲め盡力淺からざりしが本月十日中風症の爲め遠逝せられたり本會は

謹みて哀悼の意を表す

大日本婦人衛生會

追而葬儀は去十三日青山齋場に於て執行せられ本會役員總代會葬せり



新刊寄送書紹介

足立寛編述
通俗育兒新話　一册(八十五錢)　足立寛氏寄送

世間說く所多くは小兒の養育法に止り未だ胎兒に及ぼす者少し本書は先づ其缺點を補はんが爲め先づ胎兒の攝生養育法を說き次て小兒に及ぼし專ら通俗を主とし中流社會に適すへき要領を掲げたれば何人も實行し易く懇切丁寧に說かれたる良著なり

發行所　東京本鄉湯島切通坂町八番地　南江堂書店

AME-MILK

アメミルク

最良煉乳

普通の煉乳より稠度濃厚あり

▲本品は醫科大學教授藥學博士下山順一郎醫學博士高橋順太郎兩先生の指導製品なり

▲本品は乳の蛋白性滋養成分と水飴の抱水炭素とを抱合せる無比の理想的煉乳なり

▲本品は普通コンデンスミルクの如く多量の砂糖を含有せず又澱粉を混ぜざる稠度濃厚の最良煉乳に防腐殺菌せるものなり

▲從つて本品の滋養價値は價の低きを競ふ外國製煉乳の比にあらず本品は各地有名藥舖及食料品店にあり

▲發賣元 東京市南茅場町 三共商店藥品部

HAEMOGLOBIN

ヘモグロビン錠

補血新劑

▲肺病患者!! ▲貧血病者!!

▲適應症 本劑は肺病、貧血、神經衰弱ノ恢復期ニ最も賞用す用量は一回四錠以上一日三回毎食二時間後に服用すべし本劑は百分中鐵〇、四二を含有するが故に茶と共に服用すべからず。

▲注意 本劑は醫科大學に於て試驗の結果ヘモグロビン製劑中最優等品なりと認定せられたるものなり各瓶百錠入として各地有名藥舖にて販賣す必ず弊店名義のヘモグロビン錠と乞御指定

▲發賣元 東京市南茅場町 三共商店藥品部

私立大日本婦人衛生會

茨城支會規則

開設の趣旨及目的　凡人生の幸福を保持するには完全なる教育を望まざる可らず之を望まんとするには必や衛生と相俟ちて而る後始めて全き事を得るならん。されば吾人は現今東京に於る該本部に陳じて更に茨城支會を開設し吾人が日常實行する衛生の事項をして益研究し益改善を圖りて其の發達を互に努め力めんとするに在る而已●本會は私立大日本婦人衛生會茨城支會として之を當水戸市に置く●本支會々員たるとを望む婦人は何人にても入會するを得●入會手續　入會の節は氏名 族籍住所等を明記し本會事務所に申込む者とす。但し會員證は東京本部へ通知し然るのち之を交附すと雖とも徽章代は豫め前納せらるべし●會員種類會員を分ちて特別。通常。終身の三種とす終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一月金三十錢以上會員は一月拾五錢を納むると●男子にして本支會の趣旨を贊成する通常者は之を贊成員とす●本支會員は本部にて毎月發刊する雜誌を無料にて受くるを得●退會せんとするものは其旨本支會事務所に報知すべし。(死亡等は親戚知人より通知せらるべし)●支本會に左の役員を置く支會長一名、副支會長、幹事六名、評議員十名、書記、會計、庶務は幹事中より各二名づゝ互撰分擔す●役員は任期滿一ヶ年とし毎年五月總會に於て投票を以て之を定む●集會は例會總會評議員會及臨時會とす集會八月を除く毎月一回第三の日曜日に之を開く總會は五月適宜の日を以て之を開く急要の件あるときは臨時會若くは評議員會を開きて評議する事あるべし●毎會學識經驗ある知名の士に囑托して衛生上の講話演說又は之に關した實驗等をも爲し本支會員に聽講せしむ但會員は知人家族等誘引して參會することを得(此際出席の衣服は總て質素たるべし)●會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は會費を滯納するもののある時は本支會長評議會の決議を經て除名する事あるべし●茲に記述したる數項の他その必要と認むべき事項あらば成る可く本部規則を適用するものとす

明治三十四年十月創立

水戸市上市田見小路二十五番地

茨城支會

私立大日本婦人衛生會

新潟支會規則

●第一條 本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり●第二條 當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓 特別會員毎月金參拾錢通常會員仝金貳拾錢 支會員甲毎月金拾錢乙仝金五錢 ●第三條入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし●第四條會費毎月拾五錢以上を納むるものには 本會衛生雜誌を配布す●第五條會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす●第六條支會には會長一名 副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す 各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす ●第七條支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演說をなすべし●第八條毎年一月總會を開き支會の要務を擧行す●第九條 本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては 慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條 天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは 役員の協議を以て 特待員又は贊成員となすべし●第十一條 一般慈善事業の贊助 天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす ●第十二條 支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし ●第十三條 特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

明治廿九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しけ子方

新潟支會

私立大日本婦人衛生會

山形支會規則

第一條 本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條 本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事評議員は會長之を選任す役員の任期は一ヶ年とす●第三條 本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰舉庶務會計の報告をなす●第四條 入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし●第五條 本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條 服裝は精誠質素なるを要す上着及羽織は絹布を用ひるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築四通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衛生會

宇都宮支會規則

第壹條 本支會ハ私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條 本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス各役員ノ任期ハ一ヶ年トス●第參條 毎月壹回(第一日曜日)講話ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ脱會又ハ本會ヲ退會セントスルトキニ其旨事務所ニ届出ツベシ●第五條本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ヶ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又ハ知合ノ婦人ヲ誘引シ傍聽セシムベシ●第八條服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス上着及羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ第九條特ニ支會規則ニ掲ケザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

明治三十四年二月三日創立

事務所宇都宮市傳馬町三十三番地行森氏方

宇都宮支會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ



●本會徽章料左の如し

●通常會員章

第三號　メッキ製拾二錢、送費六錢

第二號　正銀製四拾錢、送費六錢



●終身及特別會員章

第一號　七十錢（黑塗箱入 送費九錢）

六十錢（桐箱入 送費六錢）

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるへし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼ね會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京牛込築土八幡町郵便局）宛振出あるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈

本誌一部定價貳拾錢

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

東京市牛込區上宮比町八番地
發行所　私立大日本婦人衛生會

編輯兼發行者　東京牛込區矢來町三番地　田中徳三郎

印刷者　東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　飯田三千太郎

明治四十年一月二十一日印刷
明治四十年一月二十五日發行（毎月一回二十日發行）
全